
勇者の息子と魔王の娘？

まあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の息子と魔王の娘？

【NZコード】

N4933W

【作者名】

まあ

【あらすじ】

剣と魔法が飛び交い、ドレイクやオーガと言った魔族から人間は身を守るように寄り添い生きていく。人間が束になつてもかなわない魔族と対等に戦う人間。それを人々は勇者と呼ぶ。しかし、この主人公は勇者をこういう『勇者？ あんなもの、ただの住所不定無職』だと。

自サイト『悠久に舞う桜』、『光と影』にもリンクしています。

第1話

『勇者』

それは誰もが憧れる職業。

『勇者』

それは魔族や魔物と言った人間に恐怖や絶望を与える者達と戦い弱き者を守る者。

しかし、この物語の主人公は『勇者を尊敬する事は無い』

なぜなら……

主人公にとつて勇者は

ただの『ろくでなし』でしかないから。

山奥の小さな村ジオスからこの物語は始まる。この小さな村のはずれに少年が一人住んでいる。少年の名は『ジーク』フィリス』。まだ、幼さの残る顔立ちをしているが一人で山に入り、薬草などを集め、薬を調合する職業についており、誰かに頼るわけでもなく祖母から受け継いだ村の小さな薬屋を営みながら一人で生きている。

(……眠い。やつぱり、昨日は山に入ってきたから、調合なんて後回しにして早く寝れば良かつた)

寝室のカーテンを開けると部屋に入ってきた朝日がまぶしかったようで表情を小さく歪ませて大きな欠伸をすると、

(……まあ、終わった事をいつまでも言つていっても仕方ないし、お客様さんもくるかも知れないから店を開けるか？……って言つてもくるのは村の年寄り連中しか来ないんだけどな)

身体を大きく一度伸ばした後、いつもとあまり変わらないであろう客層の事を考えて苦笑いを浮かべるとタンスから着替えを引っ張り出して着替え始める。

(……まあ、片づけないで寝たからな。まあ、このままにしておくわけにもいかないし。片づけるか？……その前に開店と今日も一日頑張りますか？)

着替えを終えて薬を調合している工房に移動すると昨日の調合した後に片づけを行わずに寝てしまつたため、荒れている工房を見て昨日の自分の行動に呆れるようなため息を吐いた後に店先のドアにかけてあるプレートを『営業中』に変えて荒れている工房の掃除を開始する。

(……そろそろ、あいつが来るころだな。あいつがくると仕事が進まないから、できれば無視したいんだけど)

ジークは窓から見える太陽の位置を確認するとあまり来て欲しくない客がいるようでため息を吐いた時、ジークの店のドアを「コンコン」と叩く音がし、

「ジーク、頼んだものできている？」

ジークが返事をする前にドアが開き、腰に剣をかけた青いショートヘアーと髪と同じ色の瞳が印象的な少女が店のなかに入ってくる。

「できてるけどな。今日こそ代金を置いて行けよ

「もひ。ジークは細かいよ。幼なじみの美少女がお願いしているんだから、ここにはサービスするところでしょ」

「幼なじみだと言つなら、一人で生計を立てている俺の都合を考える。毎回、代金を踏み倒されて、俺にどう生活をしろと言つんだ？」

少女はジークの1つ年下の幼なじみでこの村の村長の娘の『フィーナ＝クローケ』であり、彼女は工房で何か面白そうなものはないかといくつかの薬瓶を手に取り始めるとジークはいつも代金を支払わずに店の商品を持って行く彼女に今日こそは代金を払うように言うが彼女は代金を払う気もないようであり、

(……お前、いい加減にしろよ)

ジークはそんな彼女の様子に眉間にしわを寄せながらも祖母が亡くなつた時に彼女の父親には世話になつた事もあるため、きつくなはないよう眉間に青筋を浮かべるが、

「ジークこそ、いつまでもこんなお店やつてないで、私たちと一緒にに行こうよ。魔族や魔獣と言われる魔物の1匹でも倒せば一攫千金、大金持ちも夢じゃないんだよ。村の外には夢も希望も落ちているの。こんな村で遊んでいる理由はないよ」

「……何度も言つているだろ。俺はこの店を続ける。ばあちゃんが守ってきた店が大事だしな」

フィーナは村長の娘のためかわがままに育つてゐるらしいジークの心境など氣にする事はなく彼を冒険に誘うがジークは彼女の誘いを拒否し続けており、これ以上は無駄と判断したようで彼女の言葉に反応する事なく店の準備を続けて行く。

「ねえ。どうして、あんたはこんな片田舎から勇者様って呼ばれるまで有名になつたおじさんとおばさんの子供なんだよ。その子供のあんたが村から出るわけでもなく、1人でこんな小さなお店で満足しているのよ」

「何度も言わせるな。俺は勇者様なんかに興味はない。周りからいぐら騒がれようが、あんなもんただの『住所不定無職』だ」

フィーナは何度誘つてもジークが自分の誘いを拒否するために不満げな声を上げて彼の両親の事を引き合いに出すとジークはフィーナの言葉にでた両親の話に機嫌が悪くなつてゐるようであり、自分の両親をまるで他人を斬り捨てるように言つて、

「住所不定無職つて、他に言い方があるでしょ？ 何で、そんなに否定的なよ。おじさんもおばさんも立派な人でしょ。多くの困つている人を魔族や魔物の恐怖から救つてゐるのよ。バカにしないで

よ」

「ひるせえよ。用が済んだなら代金を置いてさしきと出て行け！
俺はお前の相手をしているほど暇じゃないんだよ……」

フィーナは何度もこのやり取りを繰り返してゐるひつで肩を落とすがジークはフィーナの相手をするのも限界のひつで代金を置いて出て行けと叫ぶ。

「仕方ないな。今日は諦めるよ。また、誘いにくるからね」

「何度きたってかわらない。と言つた、まずは金を払つて行け！！！
村長には世話になつてゐるから黙つていたが、いい加減にしろ！！！
お前がやつているのは窃盗だ！！！」

「じゃあね。ジーク…………ややつー？」

フィーナは勇者と言われてゐる両親の血を引くジークに才能がある
と思っているようで自分が有名になるために絶対に必要と思つて
いる事もあるのか諦めないと店の商品を何点かカバンに詰め込
み店を出て行こうとするがジークは彼女の行動に生活もかかつてい
るために、代金を支払えと怒鳴るが彼女は本当に代金を支払う気はな
く、ジークから逃げるようになに店を出て行こうとしてドアを開けた時、
店の前には来客なのか少女が立つており、店の外に出たフィーナは
2人と同年代くらいの赤色の綺麗なロングヘアの少女とぶつかり、
ぶつかつたショックで2人は尻もちを付く。

第2話

「だ、大丈夫ですか？」

「は、はい。大丈夫です。ありがとうございます」

ジークはフイーナが尻もちをついたのは自業自得と判断したため、彼女とぶつかった少女に手を伸ばすと少女はジークの行動に少し驚いたような表情をした後、彼の手を握つて立ち上がり、

「すいません。急いでいたものでケガは無いですか？」

「わたしは大丈夫です。あの、あなたもケガはないですか？ わたし、治癒魔法は少しばれますのでケガをしていたら言ってください」

「私は大丈夫です。これでも鍛えてますから」

「そりなんですか？ それは良かつたです」

フイーナは自分を優先してくれないジークに不満げな視線を向けるが、明らかに自分が悪い事は理解しているようで少女に頭を下げると少女は自分は明らかな被害者のはずなのだが彼女の身体を心配して聞き返すとフイーナは魔族を倒して一攫千金を狙っているため、身体は鍛えていると腕まくりをして見せて少女はフイーナの様子に柔軟な笑みを浮かべている。

(まあ。とりあえず、ケガはないみたいだな。良かつた。しかし、村では見ない顔だな？ 遺跡の探検にきた冒険者かな？ そうなる

と客だな……あれ？）

ジークは2人にケガがない事に一先ずは安心したようで小さく息を漏らすと少女の顔を見て、小さな村のため彼女がこの村の人間ではないと理解すると店にきたお客様だと思い接客に移ろうとするが彼女の綺麗な赤色の髪の間からは人族にはあり得ない2本の小さな角が頭を覗かせており、

（……赤い髪に角が2つ？ エーと、目は金色？ ……エーと、落ち着け、俺、ドレイクがこんな小さな村にくるわけがないじゃないか。獣人の類の人だよな。そうだよな）

ジークは少女の『赤い髪』、『2つの角』、『金色の瞳』と言った特徴が人族に敵対する竜の血を引いていて魔族でも上位の力を秘めており、人族を喰らい、残忍で暴力や殺戮の限りを尽くすと言つ『ドレイク』に酷似していると思いながらもフイーナと話す少女の様子にそんなわけないと思いたいようで大きく首を振ると、

「……どうかしましたか？」

「な、何でもないです」

「ジーク、どうしたのよ？ 女の子をそんな風に見たら失礼よ」

少女はジークの行動に小さく首を傾げるとジークは声を裏返して何もないと言うが頭が今の状況について行けていないようで声を裏返すとフイーナはジークの様子に怪訝そうな表情をするが、

「す、すいません。少しの間、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「はい。わたしはかまいませんけど」

「ちょっと、ジーク、何なのよ？　お客様に失礼でしょ」

ジークは少女に断りを入れるとフィーナを店のなかに引っ張り込み、少女の頭を指差し、

「……フィーナ、失礼って、お前、彼女をもう一度、しつかりと見てみるよ」

「何？　女の子をそんな風に見るのは失礼よ。まったく、それともあの娘が可愛いから照れてるの？　……あんた、最低ね」

「良いから見る」

「見たつてまさに美少女つて感じよね。『キレイな赤い髪』に『金色の瞳』に赤い髪に映える『2つの小さな角』？　あれ？　角？　……えーと、ちょっと待つてね。状況を理解するから……あれよね？　きっと獣人の類よね？」

「そうだよな？　さうだと良いな……あんな凶悪な存在が大きな国ならまだしもこんな小さな村になんか立ち寄るわけがないよな？」

ジークはフィーナに少女がドレイクかと確認して貰いたいようで少女を見て欲しいと言うがフィーナはその言葉にジークが少女に一目ぼれでもしたと思ったようで不機嫌そうな表情をするとジークはかなり切羽詰まっているようでくだらないやり取りをしている暇はないと言いたげに口調を強くして言い、フィーナはため息を吐いた後に少女に視線を向けるとジークと同じ疑問を持ったようで眉間にし

わを寄せて自分が出した答えを否定したいようで希望的な答えでジークに同意を求めるがジークは最悪の答えを否定したいようで大きく頷いた時、

「あの。どうかしましたか？」

「ひやうー?」

「あ、あのですね。一つ、お聞きしてもよろしいでしょうか?」

「はい。わたしに心えられる事でしたら」

「……」

少女は2人の様子に何か感じたようで店のドアを開けて首を傾げてジークとフィーナに声をかけるとフィーナは声を裏返し、ジークは少女が仮に自分とフィーナの考えた通りにドレイクだった場合は絶対に逃げきれないためか、確認だけはしようと決意したようで少女に聞くと少女は笑顔で頷き、そんな少女の表情にジークは恐怖より恥ずかしさが勝つたようで彼女から一度、視線を逸らす。

「……ジーク、聞いてちゃうの?」

「さ、聞かない」とビックリしようもないだろう

「だ、だとしてもよ。答えが最悪だったり、どうするのよ?」

「で、でも、逃げられる状況じゃないだる……出口は塞がれている上にドレイクって言つたら人間を一瞬で消し炭にできるような魔法を無詠唱で使つたりするんだぞ。死ぬなら死ぬで真実くらいは知り

たいだるー。」

フィーナはジークの様子に彼が決意を決めた事は理解したようだが、彼女自身がまだ覚悟はできていなにようであり、ジークの腕を肘で突くとジークはすでに生きることすら諦めているようで真実だけでも聞いておきたいと言つと、

「……あのさ。君つて、ひょっとして、ドレイクだつたりする?」

「はい。生まれて16年、ドレイクをやらせていただいています」

ジークは自分を落ち着かせるよつに大きく深呼吸をすると少女に向かい真実を確かめると少女はジークの質問の意味がわからなによつで小さく首を傾げて、自分はドレイクだと言い、

「……そ、そうですか。ドレイクですか」

「やつぱり、そつなんだ」

「はい。もうですけど、どうかしましたか?」

ジークとフィーナは少女の口から聞こえた自分達が考えた事の最悪の答えに血の気が引いて行くを感じるが少女自体は2人がどうして自分の種族を気にしているのか理解できないようであり首を傾げたままである。

第3話

「そ、その、ドレイクさんが何かようなのかな?」

「は、はい。そうですね。あ、あの、失礼ですが、お父様とお母様は御在宅でしょうか?」

「い、いや。い、いないよ。うちに帰ってきた事なんてないから、どこかで冒険とかしているんじゃないかな?」

ジークは恐る恐る少女にここにきた理由を尋ねるとどうやらジークの両親に用があるようだが彼の両親は生まれたばかりの彼を祖母に預けて一度も村に帰つてこないため両親はどうして何をしてこるかはわからないと言つと、

「帰つてきた事がない? そ、それじゃあ……す、すいません。ジーク=フィリスさんでよろしいんですね? 名乗るのが遅れてしまい申し訳ありません。私、『ノエリクル=ダークリード』と言います。ノエルと呼んでください」

「は、はい、ジーハー寧にあります」

「ちよつと、ジーク、あんたは何をしているのよ。あの娘はドレイクなのよ」

「い。いや。わかっているんだけど、なんかあの娘のペースはずれていると聞つか、完全に巻き込まれている気がする」

ドレイクの少女は自分を『ノエリクル=ダークリード』と名乗り、

深々と頭を下げるといークもつられたようでのエルに向かい合って頭を下げるが、フィーナはこの状況は絶対におかしいためかジークの首をつかみ、耳打ちをするが彼の頭のなかにあつたはずの警戒心はノエルのゆつたりとした空気に完全に流されている。

「それで、そのドレイクのノエルがおじさんとおばさんに何かよるなの？」

「ちよつと、フィーナ、押すなよ！？」

「えーと、あの、わたしは名乗ったんですが、何と御呼びしたらよろしいんですか？　あのできればお名前を教えていただけないでしょうか？」

フィーナはノエルを警戒しているようで敵意の視線を込めながらも絶対に自分程度では敵わない事も本能が理解しているため、ジークの背中に隠れて彼女にジークの両親を訪ねてきた理由を聞くとノエルはフィーナの事をなんと呼んでいいのかわからないようで行儀よく聞き返し、

「フィ、フィーナ＝クローケよ

「フィーナさんですね。よろしくお願ひします」

「えーと、いかがなれるよお願いします」

「……フィーナ、お前だつて俺と同じじゃないか」

「し、仕方ないでしょ。そ、それより、ジーク、この娘、何なの？ペースが崩されるわ。意味がわからないわ」

フィーナは警戒しながらも逆らって彼女の逆鱗に触れるわけにはいかないと判断した上で名前を名乗り、ノエルはジークに名乗った時と同様に深々と頭を下げる。フィーナもノエルにつられて、ジークの後ろから出てきて深々と頭を下げ、ジークはフィーナの様子にため息を吐くとフィーナはノエルと言うドレイクが彼女の持つドレイクからかけ離れすぎているためか眉間にしわを寄せてぶつぶつと言い始める。

「俺に聞くなよ。それでノエルはこの村にと言つか、俺の両親に何の用？」

「は、はい。私がここにきたのは、ジークさんのご両親に無駄な火種を起こして欲しくないからです」

「無駄な火種？」

「はい。えーと、ジークさんのご両親だけではないのですけど、部族間で違いはありますけど、基本的に私達は争いを好みません。それなのにドレイクだから、魔族だからと言われて多くの仲間達が争いに巻き込まれているんです」

「へ？」

「どうかしましたか？」

ジークはノエルの様子にすでに完全に警戒心は取り払われてしまつたのか先ほどまでは恐る恐る使っていた敬語も止めて、彼女にこの村を訪れた理由をもう一度聞くと彼女の口から出た言葉は自分やフィーナの持っているドレイクの印象とは異なり、世界平和や種族間

の争いを止めたいと言つた理由であり、予想の斜め上を行くノエルの回答にジークとフイーナは間の抜けた表情をするとノエルは2人の反応の意味がわからないようで首を傾げ、

「ちょ、ちょっと待つてくれ！！ ドレイクは人間に敵対していて俺達人間を餌とかくらいにしか考えてないんじやないのか？」

「それは大きな勘違いですよ。わたし達ドレイクは竜族の血をひいていると言わされているため、攻撃性に特化しているとか凶暴だとかは言われますけど、わたし達にだつて文明はありますし、家畜の飼育くらいはしていますよ。人族のお肉なんて食べません。それはあります。ふーひょーひがいです」

「風評被害？」

「そうです。それです」

「……そうなの？ でも、文献にはドレイクは人族の血肉を好むつて」

ジークは自分の頭が付いてこないためか驚きの声を上げてノエルに向かい、捲くし立てるようにドレイクに人族は餌でしかないと言うがノエルはそんな事はないと言いたいようで頬を膨らませ、ジークとフイーナはノエルの言葉を信じて良いものかわからないようで顔を見合させた後、フイーナはもう一度、確認したいようで恐る恐る自分の知っているドレイクの好物が人間だと聞き返すと、

「それは先ほども言いましたが、ドレイクは竜族の血をひいているためか、強さに憧れる人も多くて強い相手の血肉を自分の中に入れる。さらに高みを目指すと言う困った風習がありまして」

「そ、それって、おじさんとおばさんを殺しに食べにきたって事！？」

「？」

「ち、違います！？ わたしはそんな風ベジタリアン信じていませんし、何より、わたしは菜食主義者ですし」

「…………」

ノエルは申し訳なさそうに目を伏せながらドレイクは強さに憧れているだけだと言うがフイーナはノエルの言葉にやはり、彼女がジークの両親を殺しにきたと思い、声を上げるとノエルは慌てて自分は菜食主義者ベジタリアンだと言い、その言葉はジークとフイーナと言った人族から見ると信じられない事であり、眉間にしわを寄せた後、

「菜食主義者ベジタリアンって事は肉や魚は食べられないのか？」

「はい。健康の事を考えるとお肉やお魚もバランス良く食べないといけないのは理解しているのですが、どうしてもダメで……」

「…………ベジタリアンなドレイク？ どうしたらいいのかしら、今日で私の中にある常識がすべて崩れて行く気がするわ」

「…………奇遇だな。フイーナ。俺も同じ感想だ」

ジークは田の前にいるノエルと言つドレイクが理解しきれないようすでノエルにもう一度、肉類は食べないかと聞くとノエルは申し訳なさそうに言い、彼女の様子にジークとフイーナの持つていたドレイクと言う種族への価値観は破壊され始めている。

「あの。信じていただけましたか？」

「えーと……」

「信じるから、ジークから離れなさいよ」

ジークとフィーナはドレイクであるノエルが菜食主義者だと聞かされて今までの自分達のなかにある常識に顔を引きつらせていく姿にノエルは2人に信じて欲しいと上目使いでジークの顔を見上げるとジークはノエルのしぐさにときめいてしまったようで顔を赤くして視線を逸らし、フィーナはそんな彼の様子が面白くないようで不機嫌そうな表情をしてノエルを引き離すと、

「そりゃも言つたけど、おじさんもおばさんもいじになんて戻つてきた事はないわよ。用が済んだなら帰つてよ」

「そ、それなら、じこにいるか」存じありませんか？ それに帰つてこないと言つてもお手紙くらいはきますよね？」

フィーナの頭の中からはノエルがドレイクだと言う事がすっかり抜け落ちてしまつたようで恋敵ライバルを威嚇するように用が済んだなら帰れと言い、ノエルはどうしてもジークの両親と話をしたいと言つて両親に会う手がかりを教えて欲しいと言つと、

「いや、生まれて今まで一度もきた事はないよ。ばあちゃんが言ってたけど生まれた俺を置きに帰つてきた後は顔も見に来た事もないし、俺は2人の顔も知らないよ」

「ジークさんが生まれてからって、そんな、酷いです……親子なの
にどうしてですか？」

ジークは両親にあつた事はなく居場所にも心当たりはないと苦笑い
を浮かべて言うがその様子はどこか寂しげであり、寂しげに笑う彼
の表情と彼の口から出た言葉でノエルはおかしな感情移入をしてし
まつたのかボロボロと大粒の涙を流し泣き始め、

「ちょっと、何でノエルが泣くのや！？」

「だ、だつて、ジークさんが、ジークさんが」

「名前を連呼して泣かないでよ！？　俺が何かしたみたいじゃない
か！？」

「……これはお密さんが来たら大変な事になるわね。ノエル、入口
に立つてないで店に入つて」

ジークはノエルの反応にどうしたら良いかわからずには慌てるとフィ
ーナはため息を吐いてノエルを店のなかに招き入れるとドアのプレ
ートを『準備中』に替える。

「……えーと、一先ず、これでも飲んで落ち着いてくれるかな
「す、すびません」

「……涙脆弱いドレイク？　なんか頭痛いわ。ジーク、遊んでないで、
タオルとかハンカチとか持つて来られないの？　泣いている女の子
の顔をいつまでも見ているなんてデリカシーにかけるわよ。ハンカ
チなんて気の利いたものをジークが持っているわけないからタオル

とかノエルの顔を拭くものを持つてきなさいよ

「や、そうだな。ちょっと、行ってくる」

ジークはノエルの泣き顔にビービーして良いかわからずキッチンに向かうと温めたお茶を差し出し、彼女はお茶を受け取るがその顔は涙と鼻水で、すでにぐちゃぐちゃになつており、フィーナは頭を押さえながらもジークを一度、店から追い出し、

「ノエルが泣く事でもないでしょ。ジーク自身が気にしてないんだから

「で、ですけど、そんなの悲しいです。さびしいです」

「……せつ言つ風に泣いてくれるのは嬉しいんだけどさ。実際はフィーナの言つ通り気にしてないから泣きやんてくれないかな？　こうやって泣かれている方が気不味いんだけど」

フィーナはノエルに泣きやむように言つが彼女は酷く涙脆いようでいくら手で涙をいくら拭つても止まる事はなくフィーナが諦めかけた時、ジークは奥からタオルをもつて戻つてくると困ったような笑みを浮かべてノエルの頬をタオルで拭つた後に彼女の頭を撫で、

「でも、辛くないんですか？」

「どうかな？　さつきも話した通り、両親の顔は一度も見た事ないしね。知らないんだ。辛いと思った事はないよ。ばあちゃんから話は聞いているからどんな人なりをしているかは知っているけど、それに1人で生きて行くのに悲しんでいる暇はないよ。代金を踏み倒す迷惑な幼なじみもいるし」

「ちゅうと、どうして、そこで話を折るのよー?」

ノエルは涙目でジークの顔を見上げるとジークは彼女の顔を直視できないようにして視線を逸らしながらも「冗談交じりで辛くないと言つて引き合ひにされたフイーナが面白いわけもなく頬を膨らませ、ノエルはジークの気づかいに小さく頬を染めるが、

「お一人なんですか？　あ、あの、おばあ様は？」

「ああ。ばあちゃんは……」

「ちょっと、ジーク！？　それを言つたら、ダメよー?」

「1年前に死んだよ……」

「そ、そんな……」

もう一つでてきた疑問に首をかしげ、ジークは祖母が死んだと言つ事實を伝えると再び、ノエルは大量の涙を流し始め、

「……バカジーク」

「し、仕方ないだろ！？　こうなるなんて思わないだろ！？　それより、フイーナ、どうにかしろよ。俺はこんな時にどうしたらいいかわからないぞ！？」

「……ジーク、あなたは少しの間、出て行つて

「あ、おひ。任せた」

フィーナには祖母が死んだ事を言うとノエルが泣きだす事は予想出来たようで止めようとしたのだがジークは考えも無しに言つてしまつた事に頭を押さえるとジークはどうして良いかわからずに慌てはじめ、フィーナは役立たずのジークにここは任せるよりと言つとジークはノエルをフィーナに任せて逃げるように店の外にある薬草を育てている小さな畑に向かつ。

(……フイーナから始まつてノエルか？ 今日は何なんだ？ まだ、朝なのにこんな調子だと他にもおかしな事が起きそうな気がする。つて言ひか、何なんだよ。親父もお袋も帰つてこないならせめて、俺の迷惑にならないよつて行動しろよな)

ジークは店内から出ると今日はおかしな事しか起きていないせいか頭を押さえて腰を下ろすと今日の原因を会つた事のない両親のせいにしてため息を吐き、

(まあ、何もしないでいるヒトはないよな。取り合はずは薬草に水でもやるか？ 遊んでいる余裕はないからな)

販売用の治療薬の材料である薬草の仕話をするために立ち上がりると、

「ん。居た。ジーク、今日は店を開けないのか？ 店の前に行った準備中になつていてるから、まだ、寝てるのかと思つたぞ」

村で小さな冒険者の店兼宿屋『赤い円亭』を営業している青年『シリード・ホーク』がジークを呼ぶ。

「シリードさん、ちょっと、いろいろあつまつして、店は準備中です」

「いろいろ？ また、フイーナが店の商品を勝手に持ち出して売り物がなくなつたとか？」

「……それもありました。あまりにいろいろあつますから忘れてた。今日こそ、代金を回収しないと」

ジークはシルドを見て営業スマイルで返事をするがジークと回じく接客業をしているシルドの口は誤魔化す事は出来ず、シルドは苦笑を浮かべながらフイーナと何かあったかと聞くとジークは肩を落としながら大きなため息を吐き、

「相変わらず、仲が良いな。そもそも進展の一つでもしたらどうだ？」

「……冗談は止めてください。あいつはただの幼なじみです。それも俺の事を心配一つしないで迷惑かける厄介な」

シルドは変わらないジークとフイーナの距離に苦笑いを浮かべたまま聞くとジークはフイーナを恋愛対象とは全く見ていないようでもう一度、ため息を吐く。

「ジーク、鈍いのか目を逸らしているのかどうちだ？」

「どちらでもありませんよ。あいつが俺をどう思つてようが俺には恋愛感情なんてありませんよ。俺から見れば昔から人の後ろを追いかけてしつこい印象しかないんですから、昔はそれでも妹みたいには思つてましたけど、今は人の生活を覗かす厄介ものです」

「……確かに興味を引きたいからとは言つてもやりすぎつて感じもするが、全てを理解していくその反応もどうなんだ？ それはフイーナにとつてはあまりに酷だぞ」

「そうかも知れませんけど、こればかりは仕方無いですね。少なくとも迷惑をかけ続いている相手を簡単に好きになるほど俺は殊勝では無いですよ。それで、朝から店にくるなんて何かありましたか？」

「いつも受けている薬湯なら今用分はこの間、納めたばかりですよ
ね」

シルドはジークの様子にジークが鈍いのかどうかを確認するとジークはフイーナの気持ちも知つていてる上で恋愛対象外と言い切り、シルドはそんなジークの様子にため息を吐き、これ以上はこの話を続けて欲しくないためかシルドが自分の店を訪れた理由を聞く。

「ああ。それなんだけど、この間から小さな地震があるだろ?」

「ええ、揺れ 자체はたいした大きくはないんですけど、ずいぶんと長い間、続くって感じですよね?」

「ああ、先日、うちの宿に泊まつた冒険者が言つていたんだけどな。村から1日歩いたところに小さな遺跡があるだろ? その1部の壁が崩れて奥に繋がる道が出てきたらしいんだ。それでウチにも冒険者達が押し寄せると思ってな。薬湯の追加発注を頼もうと思ってな」

「へえ、遺跡か? 奥に何があるのかな?」

「ん? 興味があるのか?」

「まあ。遺跡の奥には菌類とか薬に使えるものもありますからね。最近は遺跡にも行つてないし、俺主も行つてこようかな?」

シルドはジークに遺跡がさらに続いていた事を知つた冒険者達を期待した先行投資だと言い、宿屋で使う薬湯を追加するとジークは大口の取引に類を綻ばせながらも遺跡の中にあるかも知れない薬の材料に興味を持ったようであり、そこから繋がる金の匂いに目を輝か

せると、

「……お前の実力は知っているけどな。先に行つて荒らしてくるなよ。うちの売り上げにも関係してくるんだからな。だいたい、金を稼ぎたいだけなら、冒険者になれよ。おじさんとおばさんの血をひいているだけあって、この辺の冒険者なら余裕で倒せるだろ」

「わかつていますよ。俺は基本的に遺跡の中にどんな強力な武具が有つたって興味なんかないんですから、だけど、本の中できか見た事のないような薬草があれば新しい薬が作れますしね。輸入物の無駄に高くて効果が安定しないものより、良い薬が作れれば良い儲けになりますしね」

シルドは勇者として名高いジークの両親の血を引いたジークの実力に遺跡は全て暴かれてしまうと危惧するがジークは苦笑いを浮かべながらそんなものに興味はないと言い切り、

「それじゃあ。昨日、仕入れてきた薬草を調合したら商品を持って行きますんでよろしくお願ひしますね」

「ああ。わかつたよ。その代わり、さつきも言つたが、遺跡の中を荒らすなよ。名産もない小さな村なんだ。遺跡探検に来た冒険者が数少ない商売相手なんだからな」

「わかつてますよ。それはウチも一緒ですから」

ジークは遠出をする時はシルドに良く売れる商品を預けていくようでシルドに商品の販売を頼み、シルドは再度、ジークに念を押すと自分の宿屋に戻つて行くのをジークは見送る、

「遺跡の中には薬の材料になるようなものがあれば良いんだけど、
そつと決まれば速いとこ残りの調合を終わらせて…………あ！？
ノ、ノエルは泣きやんでいるかな？ ま、まあ、覗いてみるか？」

薬の調合を始めようとすると店の中でノエルが泣いている事を思い
出してため息を吐く。

第6話

「……あのや。見られると集中ができないんだけど」

「す、すいません。でも、わたし、お薬を作っているところを見たことがないので」

「……わかったよ。その代わり、見ていても面白い事はないと思つよ」

「……ねえ。ジーク、調合を始めたのは良いけど、もう少しゆっくりとしても良いんじゃないの？ 急いでいるみたいだけど何かあつたの？」

ジークはノエルが泣きやんでいる事を確認すると調合部屋に入り、薬の調合を始め出すとノエルは薬の調合に興味があるのか調合部屋を覗いており、フイーナはジークとノエルを2人つきりにするわけにはいかないと思っており、ノエルと一緒にジークを置いておくわけにはいかないと思っているようで嫉妬混じりの視線で調合部屋を覗き込んでおり、フイーナはやる気になつてしているジークの様子に何かを感じたようだとうしたのかと聞くと、

「ああ。せつせ、シルドさんから遺跡の奥に行ける道が見つかつたつて話を聞いてな」

「へえ、あの遺跡の奥に新たな遺跡ね。知らなかつたわ」

「……フイーナ、お前、一応は冒険者の端くれだろ」

「う、うるさいわよ。私みたいな優秀な人間が行くにはレベルが低すぎるのよ」「みのり

「……口だけでは何とでも言えるよな」

ジークはシルドから聞いた遺跡の話をするが、フイーナは初耳だった。ようで少し驚いたような表情をすると、ジークは彼女を小バカにする。ように言い、フイーナは直ぐに反論するが、ジークは彼女を口だけ冒険者だと言った時、

「その遺跡って有名なんですか?」

「有名って言うか、ここら辺のモンスターは大人しいしね。冒険者を志す人間が力試しに行くような。小さな遺跡だよ……と言つか、2人ともいつまでここにいるつもりなんだ?」

遺跡の事を初めて聞いたノエルは首を傾げ、ジークはそんな彼女の様子に苦笑いを浮かべると、危険な遺跡では無い事を話した後、ノエルとフイーナがいつまでこの店にいるつもりなのかと聞く。

「あ、あの。ご迷惑ですか?」

「迷惑と言うか、ノエルは俺の両親を探しているんだろ。ここにいたつて無駄だよ」

「で、ですけど、闇雲に探すよりはここで待っていた方が会える可能性が高い」と思つたのです

「……いや、そうじゃなくてさ」

ノエルは不安そうな表情でジークを見るとジークは少し気まずそうな表情をしながらもノエルにこの場所にいる理由はないと言つとノエルはここで彼の両親を待ちたいと言いだし、ジークは世間からかなりずれている彼女の言葉に肩を落とすと、

「……で待つって言つてもさつきも言つたけど、あのろくでなし夫婦はここになんて絶対に帰つてこないよ。それに君はドレイクなんだ。人間の村に居て何か騒ぎになつたらどうするんだよ」

「騒ぎですか？　わたしは話し合つてきたんですから騒ぎなんか起こしませんよ」

「……だから、そう言ひ意味じやなくてわ」

ノエルにこの村にいるのは良くないと言つがノエルはジークの言いたい事の意味など理解できないよつて首を傾げる。

「確かにね。私もジークも、流石にノエルと騒ぎを起すつもりはないけど、他の人間はそうもいかないよね？」

「ああ、ただでさえ、もう直ぐ、遺跡探索とか言つて冒険者達が押し寄せてくるんだ。ドレイクが村の中を闊歩していたら……下手したら、村が壊滅する」

「そうね。大きな都市からノエルを殺しに来る可能性が高いわ」

フイーナはノエルの様子にため息を吐きながらもジークが言いたい事がわかるようで真面目な表情をしてノエルに言い、ジークは何もなくても村にきた冒険者が大きな街に持ち帰つた情報からノエルの討伐隊を組まれる時の事を思い浮かべたようであり、フイーナは規

模が大きすぎる話だとは一瞬考えるが、人間にとつてのドレイクが与える恐怖を考えるとジークの言う事は間違つていないと言うと、

「ですけど、わたしは人族と友好関係を結びにきたんです。騒ぎなんて起こしませんよ」

「……いやね。ノエルがそんな事を考えても周りはそう思わないから」

「そうね」

「どうしてですか？」

「普通に考えれば、そうだろ。それができたなら、人族とドレイクの争いなんて起きないんだからさ」

ノエルは自分は戦いではなく話し合いに来たともう一度、声を大きくして言うがジークとフィーナは人間の視点から見ればそんな事は絶対に成り立たないと言い、

「ですから、それを変えて行きたいんです!! 種族間の争いは何も生みません。話しあつて仲良くなれば協力できる事だつてあるはずですよ」

「まあ、それをやろうとするのは素晴らしい事なのかも知れないとさ。だけど、それは理想でしかないよ。そんな理想だけで誰かが動くなら、こんな世の中にはなりはしない。だいたい、同じ、人間同士でだつてくだらない殺し合いをしているんだ。個人でとならまだしも、種族として考えた時に違う種族となんてわかりあえるわけがないよ。生活、考え、全てが違うんだ」

「そ、そんな事はないです」

ノエルは本当に人族とドレイクとの争いを治めたいようで眞面目な表情をするがジークとそれは絶対に無理だと言い切るとノエルはジークの言葉に反論しようとするが、

「それじゃあ、悪いんだけど、2人も出てつてくれるかな。俺はいつまでも2人と遊んでいる暇はないんでね。調合の邪魔もされたくないから、店を出る時にプレートは『準備中』のままにしておいてくれ」

「ちょっと、ジーク」

「ジークさん」

ジークはこれ以上、話に付き合つ義理もないと思つていいようで2人に調合部屋のドアを閉めるように言い、調合に専念しはじめ、2人は納得がいかなそうには見えるが邪魔はできないためかドアを閉め、

「……まったく、人族とドレイクや他の魔族が争わない世界なんてできるわけはないだろ。でも……そんな世界になつたら、2人は帰つてきて、ばあちゃんの墓に手でも合わせてくれるかな?……止めよう。考えたつて仕方無い事だ。仮にそんな事になつても2人が戻つてくる事はないんだ」

ジークはノエルの理想の世界なら自分のように両親に捨てられるような人間が減るかも知れないと考えたようだが直ぐにその言葉を飲み込むと調合を再開させて行く。

第7話

「……結局、2人はここで何をやっているんだ?」

「何つて、見てわからない? 店番よ。ジークが調合している間にお客さんが来て大変だったのよ」

「……いや、その前にノエルに店番をさせるなよ。騒ぎになつたらどうするつもりだよ」

「それくらい、私だけを考えたわよ。だけど、みんながみんな冒険者ってわけじゃないでしょ。うちの村は特にお年寄りばかりだからドレイクなんて本物を見た事ない人間が多いから、あの角を装飾品くらいにしかみんな思つてないのよ。気づくとしたら、シルドさんやシルドさんのお店に泊まつてる冒険者の人達、後は元冒険者の私のお父さんくらいこよ」

「……今更だけど、平和な村だな」

「……ええ、緊張感もあつたもんじゃないわ」

ジークは調合を終えてドアを開けると店の方から声が聞こえ、店を覗くとノエルとフィーナはなぜか店番を行つており、ノエルに至つてはドレイクの象徴である頭の角を隠す事なく、村のお年寄りの接客を行つているため、ジークは今の状況に頭が点いてこないのか眉間にしわを寄せせるがノエルがドレイクである事など村のお年寄りは気づいていないようであり、2人は大きなため息を吐くと、

「ジーク、いつの間にこんな良い子を捕まえたんだい? これであ

んたの将来を心配して死んで行つたばあさんも報われるね

「フィーナちゃん、あたしはあんたを応援しているからね。いきなり現れた子にジークを取られるんじゃないよ」

「……違つからね。おかしな勘違いはいらないから」

お年寄り達はノエルとフィーナをジークの嫁候補と認識しているよう無責任に煽りだし、ジークは頭が痛くなつてきましたようで頭を押されでお年寄り達の言葉を否定するが、

「な、何を言つているんですか！？ わ、わたしとジークさんはそんな関係じゃありません！？ ジークさんはフィーナさんがお似合いだと思います！！」

「もへ、この子は可愛いね。そつやつて顔を赤らめるなんてね。あたしはこの子の味方をさせて貰おうかな？」

店に来ていたお年寄り達は完全に煽りに入つてゐるようでノエル派とフィーナ派に分かれており、

「……もつ良心よ。悪いんだけど、俺、薬の材料探しに行きたいから、特に用がないなら店を開めたいんだけど……」

「まつたく、わざわざ、こんな村はずれまで歩いてきた年寄りを追い出すつて言つのか？！ この子はどうしてこんな冷たく育つてしまつたのかね」

「……少なくとも世話にはなつたけど育てて貰つた記憶はないから、それについーなもそつだけど、ここにお茶を飲みに来られても困る

んだよ。俺にだつて俺の生活があるんだから、俺に稼ぎがなくなつても誰も養ってくれないだろ」「

「さてと、ジークも忙しい良いみたいだし、あたし達も帰らうか？」

ジークは薬草探しに出たいと言つとお年寄り達から苦情が出るがジークは大きなため息を吐いて生活を援助してくれるのかと言つとお年寄り達はジークの話を聞こえないと聞いたげに店を出て行き、

「……まつたく……って、店の物を持つてくなーー！」

「あの、ハイーナさん、このお店って……」

「限二のよ。」
「はやいの店だから」

お年寄り達は店を出て行く時に当たり前のように代金を払う事なく商品を持って行き、ジークはお年寄り達を追いかけて店を出て行き、ノエルはジークとお年寄り達の様子に顔を引きつらせるがフイーナは自分も良くジークの店から勝手に商品を持って行くためか表情を変える事なく言い切ると、

「そんなわけないじゃありませんか!? ジークさんは「」のお店が大切だって言うのはおばあ様の事もありますし、わかるじゃないですか。お店を維持するのってお金がかかるんじゃありませんか?」

「そうかもね。だけど、私もおばあちゃんもジークがここに縛られるのって望んじやないから」

ノエルはジークの気持ちを考えて欲しいと言うがフィーナはジークには自分と一緒に冒険者なつて欲しいと思っているため、自分の考

えをジークの祖母の考え方と決めつけて言つ。

「……まったく、フィーナもそつだけど、何なんだよ。と言つた自分達は年寄りだって言つなら、店の外から全力で走つて居なくなるなよ」

「ジークさん、あの。お店つて大丈夫なんですか？」

「ん？ どうかした？」

ジークは店に戻つてくると逃げて行つたお年寄り達を捕まえる事が出来なかつたようで眉間にしわを寄せて帰つてくるとノエルはジークの店を心配しているようで不安そうな表情でジークに声をかけるがジークは特に気にした様子もなく首を傾げると、

「お店つて潰れたりしませんよね？」

「……ノエル、どうしてそんな不吉な事を言つんだ？」

「だ、だつて、お金を払わないで商品を持つて行く人もいますし」

「まあ、確かにそれは困りものだけど、代わりに野菜とか食料も貰つたりしているからな……なかには代わりのもの一つ持つてこない奴もいるけど」

「何よ？ カわいい幼なじみが顔を出してるのよ。それだけで充分にジークのためになつてるでしょ」「

ノエルは不安そうな表情のまま店が潰れないかと聞き、ジークは眉間にしわを寄せながらノエルにおかしな考えに至つた理由を聞くと

納得が言つたようで彼女に心配するなと言う意味を込めて彼女の頭を撫で、他の客とは違い何も持つてこないフィーナを責めるよう視線を向けるがフィーナは自分は悪くないと言いたいようでジークを睨み返す。

「一番厄介なのが幼なじみなんだからな。一人だけだし、どうにかなる……って、だから、泣かないでくれ！？」

「で、ですけど……」

「だ、大丈夫だから、頼むから、これ以上、泣かれると……」

「そろそろ、ジーク、うちの畠にできた野菜を後で取りに……これは修羅場？　お邪魔したみたいだね」

ノエルはジークは心配ないと言つが彼女の頭の中ではジークの店が潰れる事しか考えられないようでジークに抱きついて泣きだし、ジークはそんな彼女の様子に慌てて泣きやむように言った時に先ほど逃げて行つたお年寄りの一人がタイミングよく店のドアを開けるとジークとノエルの様子を見て生温かい目で2人を見た後、そつとドアを閉め、

「待て！？　勘違いだから！？」

「何も言わなくて良いんだよ」

ジークはこの状況を村に広められるわけにはいかないため、お年寄りを追いかけようとするがノエルを引き離す事もできないため追いかける事も出来なく、

「……今日は厄日だ」

「へえ、可愛いノエルに抱きつかれて厄日？ ジーク、あんた何様よ？」

ジークは肩を落としてため息を吐くとノエルに抱きつかれているジークをフィーナは笑顔ではあるが殺氣混じりの視線で睨みつける。

「ジークさん、すいませんでした」

「……できれば、もう止めて欲しい。と言うか、小さな村だから商品を持ってシルドさんの店に行くのが怖いんだよな。あ。ノエル、悪いんだけど、そこの赤い瓶を3つ取ってくれるかい？」

「これですか？」

「ん。ありがと」

「……」

ノエルが泣きやんだため、ジークは薬草探しに行く前に先ほどシルドに頼まれた商品をシルドの店に届けようと思つたようで商品をまとめている様子をフイーナはジークがノエルと仲が良さそうに話している姿が気に入らないようで不機嫌そうな表情で見ているがジークはフイーナ無視して作業を続けており、

「これで発注された商品は全部だな。ノエル、ありがと。助かったよ」

「い、いえ、こちらこそ、先ほどからご迷惑をかけてばかりですし、これくらいはお手伝いしないと」

「俺はシルドさんの店に商品を持って行くから、店から出でて… なあ、ノエル」

「はい。なんですか？」

ジークはノエルが手伝ってくれたためか思ったより、商品を用意する時間がかからなかつたため、ノエルに頭を下げるヒノエルはジークに迷惑をかけてしまつたため、彼女もジークに向かい深々と頭を下げるとジークはそんな彼女の姿に苦笑いを浮かべるとシルドの店に出かけようとするが今までの流れが妙にしつくりときていたが店の外に一步足を踏み出そうとした時に冷静になつたようドノエルの名前を呼ぶと彼女は首を傾げる。

「せつしきの話に戻るんだけビ、ノエルはこの村に面座のつむりなのか？」

「はい。迷惑でしょうか？」

「いや、それは冒険者に見つかなければ問題はない氣もしてきたんだけど……ビニに住む氣？」

「できれば、ここに置いて頂きたいのですけど」

ジークは調合室で話していたノエルが村に面座る場合などに住むのかと聞くヒノエルは何も考へていなかジークの家に面候させて欲しこと言つと、

「そんな事を許すわけにいかないでしょーー！」

「どうしてですか？」

「当然でしょ。何かあつたらいひあるつもつ」

フイーナは声を上げてノエルがジークの家に住む事を反対し始める
がノエルは意味がわからないようで首を傾げている。

「……ノエル、いきなり何を言い出すんだ？」

「ですけど、わたしはジークさんのご両親に用があるのですし、
ここにいた方が都合がいいわけで、それにわたし、お店番しますし、
お店番が居れば勝手に商品を持って行く人もいなくなりますし、こ
れでお店が潰れなくて済みます」

「……いや、潰れないから、そこまで酷い経営状況じゃなからね。
村の人達以外の冒険者の人達は常識があるからちゃんとお金を払つ
てくれるし」

「むしろ、ノエルが手伝つと人件費がかかるから潰れるんじゃない
の？」

ジークはノエルの言葉にため息を吐くと彼女は自分はジークの両親
に用があるのでジークの店が潰れないようにと手伝いをすると言つ
始め、ジークはそこまで心配されなくても良いと言つとフイーナは
ジークが先ほどからノエルの事を気にかけすぎている事が気に入ら
ないようでノエルの手伝いでこの店が潰れるんじやないかと笑う。

「そんなわけないだろ。一人や2人の給料くらいだせる。ノエル、
わかつた。ばあちゃんの部屋を片付けるから、ここにいる」

「ありがとうございます。お世話になります」

「あつ！？」

ジークはフイーナの言葉に意地になつたようでノエルを住み込みで雇うと言つてしまいノエルは嬉しそうに頭を下げ、ジークは直ぐに冷静になつたようだが既に遅く、

「バカジーク」

「……言つな。俺はシルドさんの店に行つてくるから、フイーナは用がないなら帰れよ。ノエルはなんか適当にしていてくれ。シルドさんに商品を届けたら一度、戻つてくるから、その後にもう一度、よく話をしよつ」

「は、はい。わかりました」

フイーナはジークをジト田で見るとジークはため息を吐いた後にノエルに後で詳しい話をすると言い、ノエルの返事を聞くと店を出て行き、

「ノエル、とりあえず、部屋を片付けようか？」

「勝手にお部屋に入つて良いんでしょつか？」

「まあ、大丈夫でしょ。私もジークが大切にしているものくらいはわかるしね。それに……片付かないでノエルがジークの部屋で寝るとかなつても困るし。うちに泊められればジークと何か起きるような事はないと思つけど、お父さんが相手だとノエルの正体ばれるだろうし」

「フイーナさん、どうかしましたか？」

「な、何でもないわよ！？ ジークがおかしな事をしようとしても

困るから部屋のドアに鍵とかも付けないといけないからね。ノエルの部屋になるなら雑貨屋も見てこないといけないからね。女の子が住むんだから

「
フィーナはノエルとジークに何かあっても困るため、ノエルをジークから守るために部屋を片付けると言つと店の奥にあるジークの家に入つて行き、ノエルはジークがいないのに勝手な事をして良いのかわからないが一人でいるのは不安なようでフィーナの後を付いて行く。

「シルドさん、注文の品を持ってきました」

「お。ずいぶんと早かつたな」

「……これ、置いておきます」

ジークはシルドの経営している冒険者の店兼宿屋『赤い月亭』を訪れるとかウンターで料理の下準備をしていたシルドと数名の冒険者達は何かあるのかジークを見てニヤニヤと笑つており、ジークはシルドの表情にすでにこの店は敵陣だと言つ事を理解したようでカウンターテーブルに持つてきた商品を置くと逃げるよつて店を出ようとすると、

「まあ、ゆづくつして行けよ。お茶ぐらには奢るからや。何なら、お茶菓子も付けるから」

「いや、俺は遺跡の奥に行つてくるんで、あまつ遅くなると…」

「愛しの美少女が心配すると」

(……逃げられそうにもないよな)

しかし、シルドがジークの首をつかみ、シルドの様子にジークは自分の考えが確信に変わったようで時間がないと言つて逃げ出そうとするのだが店のなかに陣取つている冒険者達はカウンター近くに集まり、ジークを逃がさないように距離を詰めた組みと出入り口を固

めている組みの2つに分かれてジークの逃げ道を塞いでおり、ジークは自分が不利だと理解し、顔を引きつらせると、

「そり身構えるなよ。別に獲つて食おうってわけじゃないんだ」

「……確實に食い物にしている日ですよ」

「そりゃあな。あれだけフイーナのアタックから逃げていると思つたら、いつの間にか通い妻だぞ。詳しく聞く必要があるだろ?」

「……違いますからね」

シルドのところにも先ほどのお年寄り達に見られたノエルの様子が伝わつてゐるようでシルドは楽しそうな表情で言うとジークは諦めたようでカウンター席に座り、ジークの前にはシルドからお茶が出され、出入り口を固めていた冒険者達もジークの話を聞くためにカウンターそばの席まで移動し、ジークは完全に玩具にされる事が理解出来るため、大きなため息を吐く。

「なら、何なんだ?」

「何か、うちの住所不定無職に話したい事があるみたいなんですかど」

「お前の両親に? ここに居たつて無駄だろ。俺だつて赤ん坊のお金をこの村に連れて帰つて来た時から一度も帰つてきたつて聞いてないし、見た事もないぞ」

「そりなんですよ。それも話したんですけど、住所不定無職ですかね。居る場所もわからないし、うちで待つていた方がまだ会える

かもしれないと言ご始めた

「やつやつて引きとめて、自分のものにするつもりか？……ジーク、お前はそんな風に頭を使う人間だったんだな。お兄さんはお前を見そこなつたぞ」

「いや、男とはそういうものだ。ジークの成長に乾杯だ！…」

「……違いますからね。成り行きですから、それで俺も困っているわけですし」

シルドは否定するジークにノエルがドレイクと言う事を伏せながら自分の両親に会いにきたと言うがシルドもジークの両親には会った記憶が曖昧なようで首を傾げるとジークはノエルとのやり取りを思い出してきたようで深いため息を吐くがシルドや冒険者達はより話を面白い方向に持つて行きたいようでジークの策略だと言い始めるトジークはこれ以上は付き合えきれないと言いたげに立ち上がり、

「シルドさん、商品、お願いします。俺はもう行きますんで」

「ああ、わかつているけどな……ジーク」

「何ですか？ これ以上、おかしな事は聞きませんよ」

「まあ、そう言つな。うちの村は若い人間が少ないんだ……村のためにも逃がすなよ。それにお前の反応を見ると満更でもなさそうだしな」

「……だから、違つて言つてますよね」

店に戻るうとするシルドは眞面目な表情をしてジークを呼び止め
るがやはり、ジークをからかう事でしかなくジークは力なく笑うと
店を出て行く。

(……まったく、どうして、あの入達は俺をからかう事しか考えないんだよ。確かにノエルはちょっと……いや、かなり、可愛かつたけど、会って直ぐにそんな事になるわけがないだろ。それに彼女はドレイクなんだからあり得ないだろ？)

ジークは店に戻る途中でシルド達から言われた事にため息を吐きながらもノエルの顔が頭によぎったようで顔が熱を帯びて行くのに気づくがノエルはドレイクだと思いだして首を振り、自分の考えを振り払い、

(……しかし、どうすりや良いんだ？ ドレイクだつて知れ渡つたら、下手したらひりの村、王都から討伐隊や有名どころの勇者御一行様とかがきて村ごと潰されるぞ。だからと言つて、ノエルは村を出てきそうにないし……と言つたが説得できる自信がない)

ノエルが村にいる事で考え方られる最悪の事態が思い浮かんだようでも村から追い出す方法を考えようとするが彼女の泣き顔が目に浮かんだようで自分にはどうしようもできないと思つてしまつたため息を吐くと、

(……一先ずは目立つあの角を隠す事を考えないといけないよな？ あれを隠せばそれなりにこまかせるかも知れないんだけど、どうすれば良いかな？)

ノエルを村から追い出す事より、ドレイクだと隠す事に考え方を変えようと考へ始め、眉間にしわを寄せながら歩いていると店の前に着

け、

「……どうするかな？」

「どうするって何かあつたんですか？」

「お帰り、いつまでも遊んでいるんじゃないわよ。早く片づけを手伝いなさいよ」

ため息を吐きながら店のドアを開けるとエプロンをつけたノエルとフィーナがジークを出迎える。

「……何をしてるんだ？」

「何つて、後片づけに決っているでしょ。おばあちゃんの部屋、物置にはなってなかつたけど、ジークの事だから掃除はまともにしてないと思つたら案の定だつたからね」

「掃除？ フィーナが？ ノエル、フィーナは物を壊さなかつたか？」

「えーと、だ、大丈夫です。何も壊れてないです」

ジークは2人の様子に眉間にしわを寄せるとフィーナはため息を吐くがジークはフィーナに掃除などできるわけないと思つていいようでノエルに聞くとノエルは申し訳無さそうな表情をし、

「……やっぱり、フィーナ、お前はガサツなんだから店の物を触るな。つたぐ、ばあちゃんの大切にしてたものだつてあるんだ。お前に壊されてたまるかよ」

「な、何よ。私だつて、少しくらい手伝おうと思つたのに、だいた

い、そんな事を言つなら、掃除ぐらいしておきなさいよ

「ジ、ジークさん、フィーナさんはわたしのために」

ジークは頭を押さえるとフィーナにおかしな事をするなと言つとフィーナは不満そうな表情をしてジークが悪いと言いだし、2人の間にはピリピリとした空気が漂い始めるとノエルは2人の間に割つて入るが、

「ノエル、甘やかすな。だいたい、俺の経験上、こいつに関わるとろくな事がない。悪いけど、片づけは俺一人でやるから、奥に入つてくるな。フィーナはお前は邪魔だから帰れ。つたく、今日中に遺跡に行つて来たかったのに無理じやないか。余計な事ばかりしやがつて」

ジークはシルドの店でからかわれた事もあるせいかイライラしているようで迷惑な行動しかしないフィーナの相手をしたくないようで1人で奥の部屋に入つて行く。

「フイ、 フィーナさん？」

「……大丈夫よ。慣れているから」

ノエルはフィーナがジークの言葉に眉間にしわを寄せているのを見てフィーナに声をかけるがフィーナは自分の怒りを落ち着かせるために大きく深呼吸をすると、

「私、帰るわ。ノエル、ジークにおかしな事をされそうになつたら、全力で攻撃しなさい。消し炭にしてもかまわないわ」

「おかしな事ですか？」

「……良いわ。ノエルのそんな顔を見ていると毒氣を抜かれる」

ノエルにジークに襲われそうになつたら、躊躇する事なく攻撃しろと言つがノエルは意味がわかつてないよつて首を傾げており、フィーナはノエルの様子にため息を吐き、

「私は一先ず帰るわ」

「は、はい。今日はお世話になりました」

フィーナは自分の家に帰ると言つてノエルはフィーナに頭を下げる。

(……つたぐ、何をやつたら、ここまで荒らせるんだ？ まめに掃除はしてなかつたけど、少なくとも荒れてはいなかつただろ？ ……これは本当に今日中に遺跡探索は無理だな。せつかくのチャンスなのに冒険者が入ると薬草類も取られるし、知識のない冒険者なら貴重な薬草も平氣で踏みつぶしていくからなあ）

ジークは祖母の部屋のドアを開けると部屋は予想以上に散らかっており、大きく肩を落としてため息を吐き、フイーナへの怒りを感じながらも片付けを始めよつとすると、

「あ、あの。ジークさん

「どうかした？」

「わ、わたしもお手伝いしたいんです。こんな風になるとほ思つていませんでしたし、あ、あの。すいませんでした」

ノエルがフイーナを止める事が出来なかつた事もあるため、申し訳なさそうな表情で部屋の中を覗き込み、ジークは彼女に何かあつたかと聞くとノエルはジークに頭を下げて掃除を手伝わせて欲しいと言つが、

「……良いよ。ここはあちゃんの部屋だし、あまり触つて欲しくないものもあるから、だから、なるべく、そのままにしておきたかつたつてのもあるし、それでもばあちゃんの服とかは有つても仕方ないし、他にも片付けないといけないものがあるから、選別もしないといけないから……まあ、ここまで、荒されると思つ出も何もあり

つたもんじやないかも知れないけどさ。それでもね。懐かしむものはあるんだよ」

「す、すいません。わ、わたし、何も知らなかつたので、そ、そんなに大切なものがあるなんて思わなかつたので、フィーナさんも気にならないで良いつて言つてましたし」

ジークはこの部屋には物以上に祖母との思い出が詰まつてゐるため、他人であるノエルやフィーナのような幼なじみであつても触れて欲しくないものがあるため、一人で片づけをしたいようであり、幼い頃のジークと彼の祖母が並んだ写真の入つた写真立て手に取り、写真を撮つた時の事を思い出したのか当時を思い出しているのか祖母の事を思い出して優しげな笑みを浮かべながらもノエルの言葉を否定するとノエルはジークの様子に彼が怒つてゐると思つたようで不安そうな表情でジークに頭を下げる。

「……いや、ノエルが謝る事じやないよ。それを知つてゐるのにフィーナがここに入つてきたんだろうから、さつきも言つたけど、この部屋には俺とばあちゃんの思い出もあるからね。あいつはこの部屋や店が俺をこの村に縛り付けているとか勝手に思い込んでるんだろ。だから、この店を辞めさせたいんだろうけど、俺的にはそれだけじゃないんだよ……やっぱり、手伝つて貰おうかな。しばらくはここにいるならここはノエルの家になるわけだし、家族は支え合うものだからね」

「は、はい。何から始めたらいですか？」

ジークは自分の考えを祖母の意見だと言つて我が物顔でジークの家を荒らしまわるフィーナに怒りは感じているがノエルに当たるわけにはいかないため、彼女に気にしないで欲しいと言つたがノエルの表

情は晴れず、ジークはそんな彼女を見て彼女を元気づけようと思つたようで笑顔を見せると考え直したと言つてノエルに部屋の片付けを手伝つて欲しいと言つとはノエルは顔を上げて返事をし、2人で部屋を片付け始める。

「い、 いただきます」

「ベジタリアン 菜食主義者（ベジタリアン）って言つていたから肉と魚は使ってないけど、 口に合
うかな？」

片付けを終えると日も暮れてきたため、 ジークは夕飯を用意すると
ノエルは今まで見た事のないメニューのためか遠慮がちに箸を伸ば
し、 そんな彼女の様子にジークは苦笑いを浮かべながら聞き、

「お、 美味しいです」

「そう。 それなら良かつた」

ノエルはジークの料理を食べて目を輝かせるどジークは嬉しそうな
表情を見せて自分も食事を始め、

（一人じゃない夕飯か？ 久しぶりかな？ ばあちゃんが死んだ後
はしばらくは村のみんなが気を使ってくれてたけど、 もう一人の夕
飯も慣れたと思ってたんだけどな）

「あの。 ジークさん、 どうかしましたか？」

「あ。 「ごめん。 こんなのも久しぶりだと思つてさ。 一人じゃない夕
飯つて久しぶりだから」

ジークは田の前でジークの作った料理を美味しいそうに頬張るノエル
の姿に祖母と一緒に食卓を囲んでいた事を思い出したようで少しだ

け表情を緩ませた時、ノエルはジークの視線に気づいてジークの料理の美味しさに休む事なく箸を動かしていた事が恥ずかしいと思つたようで気まずそうな表情をし、ジークはそんな彼女のかわいらしい様子に苦笑いを浮かべて考えていた事を素直に話す。

「そうなんですか？あの、フィーナさんと一緒にお夕飯を食べた
りはしないんですか？」

「しないな。だいたい、あいつと2人で飯なんてうるさくてやつく
りもできないしね」

「あまり、そういう事は言わないで上げてください」

ノエルはフィーナと一緒に夕飯を食べていてもおかしくないと思つたようだがジークはフィーナと夕飯はあり得ないと言うとノエルはくすくすと笑うが、

「ノエル、あのさ。家に住むのはかまわないんだけど、と言つか、君がドレイクだって考へると下手に動き回るよりは家にいた方が良いんだけど、一つ、どうにかしないといけない事があつてさ」

「何でじょうか？」

ジークはノエルとこれから彼女が村に住むと考へた時に話をしてもおかしいといけない事があるため、言いにくそうに話し始めるとノエルはジークが言いたい事がまったくわからないようで首を傾げ、

「いや、俺もノエルに会つまではドレイクって種族に偏見を持つてから良い難いんだけど、たぶん、ノエルがここにいるって知れる問題になるんだ。最悪、この村は潰されちゃうかも知れない」

「ど、どうですか！？」

「いや、ノエルも言ってただろ。人間とドレイクには戦争の歴史があるからね。多くの人間はノエルを含めたドレイクに敵意を持つ。うちの村の年寄り連中はノエルがドレイクだって事に気づきもしなかつたけど、遺跡の奥にまだ遺跡が続いているって事がわかつたら、しばらくは冒険者が溢れてくる。冒険者が相手だとノエルがドレイクだって気づく人間が出てくるから、そうするとこの村にドレイクがいると王都に連絡が入り、もしかしたら討伐隊が編成されくるかも知れないし、村の人達はノエルに協力した裏切り者だと言つて殺されてしまうかも知れないんだ」

「村の人達が殺されてしまう？……すいません。そんな事、考えもしませんでした」

ジークはノエルが村に居座る事の危険さを彼女に話すとノエルは事の重大性に気づいたようで顔を青くする。

第13話

「それで、人前に出る時は角を隠せないかな？と思つてさ。それを隠すだけでもできれば良いと思つてさ」

「角を隠すですか？」

「うん。角はドレイクの象徴だしね。角を隠すだけでもどうにかなると思つんだけど……」

ジークはノエルを人族の村に置くのにカモフラージュのために彼女の2本の角を隠したいと言うが角はドレイクの象徴であるため、ジークはノエルが怒るのではないかと少し緊張したよつて言つて、

「えーと、それなら、折っちゃいましょうか？」

「……」

ノエルは怒るぢにかドレイクの象徴である角を簡単に折ると言つ始め、想像するらしていなかつた言葉にジークは言葉を失つてしまつが、

「そうしましよう。ジークさん、ご飯を食べ終わつたら協力してください」

「ちよ、ちよつと待つて。今、頭を整理するから

「どうかしましたか？」

ノエルは角を折る事に抵抗がないようであつたつと言つてジークはどうしたら良いかわからないようで顔を引きつらせるとノエルはジークの表情を見て首を傾げる。

「どうかしたじやなくてね。あのさ。ドレイクにとって角つて大切なんじやないの？ 話では冒険者に角を折られたドレイクは怒りで街を一夜にして滅ぼしたとか聞いた事もあるよ」

「えーと、確かにそつとつ人もいますけど、この角つて折れても生えますし」

「……はい？」

ノエルに角は大切なものではないかと聞くがノエルはジークの言葉の意味がわからないようで首を傾げるとジークは改めて聞かされた事実が信じられないようで呆気に取られたような表情をすると、

「……えーと、もう一度、今のところを言つて貰つても良いかな？」

「『飯を食べ終わったら協力してください』？」

自分の耳を疑つたようでノエルに角が折れた件をもう一度、聞きたいようで確認するとノエルはジークの言葉に首を傾げたまま、もう一度、角を折るのに協力して欲しいと言つが、

「もうちょっと後

「どうかしました？」

「おしい。もう一聲」

「「」の角つて折れても生えますし」

「ヤ！」……」

「ど」「ですか？」

ジークは聞きたかった言葉ではなく、何度もノエルとの会話を続け、確認したかつた言葉で声をあげるがノエルはジークが何に食いついているかわからないようであり、

「つ、角つて再生するの？」

「はい。それがどうかしましたか？」

「……いや、さつかも言つたけど怒りで街を滅ぼしたとか、冒険者に角を折られたドレイクとかの噂つてのは多いだろ。それにやつぱり、その角はドレイクの象徴だし、簡単に折つて良いものなの？」

ジークはノエルに真相を確かめようと真剣な表情をして聞くがノエルの反応は薄く、ジークはもう一度、角を折られたドレイクが起こした有名な話をする。

「角を折られたドレイクのお話はわたしもいくつか聞いた事がありますけど、角を折った人の武勇を認めてその長さに調節しているドレイクもいますよ。先ほども言いましたけど、わたし達ドレイクは強さには憧れや敬意も持つてますから、もしかしたら、その人達は何か卑怯な事をされて角を折られたのかも知れません

「やう言つ事もあるのか？」

「少なくともわたしの伯父様は人族の方に角を折られた事を誇りに思っていました。良き武人に出会えたと」

「……ドレイクってただの戦闘好きなのか？」

ノエルはジークの話のよつたドレイクばかりではないと言つと自分の伯父はその時の話を誇らしげに語つてくれたと言い、ジークは自分が持つていたドレイク像がノエルと話をする事で今日一日で崩れ去っているため大きく肩を落とすと、

「それじゃあ、角を折る事には何の抵抗もないって事で良いのか？」

「はい。問題ないです」

「それじゃあ、夕飯を食べてからだね」

「はい。お願ひします」

ジークはもう一度、確認するよつたノエルに聞きノエルは笑顔で言
い切ると食事を再開させるがジークは何かいろいろと納得が行かな
いようで眉間にしわを寄せた。

「ノエル、折るって言つても簡単に折れるものじゃないよね？」

「そうですね。こんなに硬いとは思いませんでした」

夕飯を終えてしばらくするとジーグとノエルはノエルの頭に生えている角に折ろうとするがドレイクの象徴とまで言われている角は当然堅く、折れる事はあらかじめ傷付かないため2人は大きなため息を吐くと、

「そりやそうだよな。実際は人族の冒険者で勇者とか英雄とか言われる人間が正面からぶつかってようやく折れるようなものなんだし、俺じゃ、無理だ」

「ですけど、これがあると不味いんですね？」

「ああ、少なくともウチの村の人間以外には見せるわけにはいかないよ。だけど、今は村に多くの冒険者が集まつてくるわけだし」

「そ、それなら、その冒険者さん達がいなくなるような状況になれば問題がないんでしょうか？」

「まあ、そうだろうけどどうするつもり？……って、それは不味いだろ。それに冒険者の数が減るとウチの儲けがなくなるんだ。生活ができなくなる」

ジークは改めて考へると自分の力量ではできるはずもないがノエルが村の中には不味いため、困ったようで考へをまとめようとした。

頭を乱暴にかくとノエルは首を傾げながら冒険者が集まらないようにすれば良いと言つとジークはノエルの言いたい事が理解できたようだがそれをするとノエルを雇うのは難しくなると言つ。

「ジークさん、お願いします。わたしにはここに残っているしか手がかりがないんです」

「だけじゃ……」

「だ、ダメでしょうか？」

「……わかつたよ。でも、俺はウチの両親と違つてたいした戦いの才能はないから直ぐに奥まで行けるとは限らないけどな」

ノエルにもノエルの目的があるため、この村でジークの両親を待つていたいと涙目でジークの顔を見上げ、ジークはノエルから視線を逸らそうとするがノエルはジークの視線を追いかけるように動き、それを何度も繰り返した後、ジークは他にいい考えも浮かばないため、ノエルの言葉に頷くと、

「あ、ありがとうございます。ジークさん」

「ノ、ノエル!? 落ち着け! ? この状況はいろいろと不味い!

?」

「……ジーク、ずいぶんと楽しそうね」

ノエルは嬉しさのあまりジークに抱きつきジークはノエルの突然の行動に顔を真っ赤にして放れるように言つたがノエルはジークが慌てている理由がわからないようで首を傾げていると後ろから怒りのこもった声が聞こえ、

「フイ、フイーナ、お前、何しにきたんだよー?」

「何? 決まってるでしょ。あんたから、ノエルを守るためよ。私もここに住むわ」

ジークは壊れた玩具のよつにギギギと硬い動きで振り返ると額に青筋を浮かべて背後に真っ黒な怒りのオーラをまとったフイーナが立つており、ノエルにライバル心を燃やしているようでジークの家と一緒に住むと言つが、

「は? 何をわけのわからない事を言つているんだよ? だいたい、お前はこの村に家があるんだぞ。おじさん達は何を考えてるんだよ!...」

「そんな事は良いから、ノエルから放れなさいよ。このスケベ男!」

「!

「あ、あの。フイーナさんも落ち着いてください」

ジークはフイーナの言いたい事がわからないため、彼女に家に帰るよつに言つがフイーナはジークの手の中からノエルを引っ張り出すとジークを睨みつけ、ノエルは2人が言い合ひを始めた事にどうして良いのかわからぬようでおろおろとする。

(……何か、俺、流されてるよな。まあ、フイーナがいれば一先ずはノエルの事もどうにかしてくれるだろうから、この時間からでも行けるのはありがたいけど)

ノエルが仲裁に入りジークとフイーナのケンカも一先ず、落ち着くとジークは時間が惜しいため部屋に戻り遺跡調査の準備を始めていると、

「ジークさん、ちょっと良いですか？」

「ああ。開いてるよ……おい。フイーナ、これだけいつつもりだ？」

「どういつつもり？ 見ればわかるでしょ。私とノエルも一緒に遺跡調査に行くのよ」

ジークの部屋のドアをノエルがノックし、ジークが返事をするとなぜかすでに冒険の準備を終えたノエルとフイーナが部屋に入ってきたジークは眉間にしわを寄せながらこの状況を一緒に行くと言いくに出したであらうフイーナに聞くが彼女は悪ぶる事な答え、

「それより、早くしなさいよ。何で男のジークが一番準備が遅いの

「あ

「フイーナさん、それはわたしもフイーナさんもほとどど持つて行くよなものはありませんし」

「……あのなあ。フィーナ、考える。ノエルはお前みたいなガサツな娘じゃないんだぞ。遺跡調査とか危ないとこに連れて行けるわけがなだろ」

「誰がガサツよ。それにノエルはドレイクなんでしょ。この村までだって1人できただから充分な戦力になるでしょ。私やジークより強い可能性の方が高いわよ」

フィーナはジークに早く準備を終わらせるように言つとジークはノエルを連れて行くわけにはいかないと言つたが、フィーナはノエルは充分な戦力になると言い、

「……確かに、ノエルを見ているとそんな気がまったくしないがノエルはドレイクだった」

「ええ。話をするたびに『冗談だと思えてくるのが不思議なくらい』にね」

ジークはフィーナの言葉でノエルが自分達とは違う事を思い出し、フィーナは話をするたびにノエルがドレイクだと信じられなくなっているようで眉間にしわを寄せ、その話題の中心であるノエルは意味がわからないようで首をかしげているが、

「確かにそうかも知れないけどな。少なからず、冒険者が集まっているんだ。そんななかでノエルを連れて回るわけにはいかないだろ」

「大丈夫よ。こんな時間に遺跡調査をする人間なんていないから、それより、早くしなさいよ。時間がないんだから」

「だからと言つてもな

「ジークさん、行きましょう。ジークさんは家族は支え合つものと言つてくれました。わたしのせいでジークさんに迷惑をかけているんです。そんなわたしが今できる事はジークさんをサポートするくらいですから」

「……まったく、今日は何なんだろうな。流されすぎている気がする。まあ、仕方ないか。早く行つて終わらせるぞ」

ジークはそれでもドレイクであるノエルが冒険者に見つかる危険を危惧しており、踏み切れずにはいるがノエルが笑顔でジークの助けになりたいと言うとジークはしばらく聞く事のなかつた自分を家族だという言葉に乱暴に頭をかいた後、2人とともに遺跡に行く許可を出すと薬草採取など1人で山々を歩きまわる時に持ち歩く1対の魔導銃^{ヤリバ}を腰につけると3人で家をして遺跡に向かう。

小さな村のため、日が落ちると街灯がない村では月明かりを頼りに歩くしかなく、村の中ではまた家々から漏れる明かりがあるが村から少し離れた遺跡に向かっているため、すでに灯りが月明かりとジークが足元を照らすために持ってきたランタンのみである。

「……2人とも足元には気を付けてくれよ」

「わかつてゐるわよ。そういうジーグこそ、足を滑らすとかは止めてよね」

「は、はい。気を付けます！？」

ジークはランタンで足元を照らして歩いているものの3人分の足元を照らすには光度は足りないため、後ろをついて歩いているノエルとフィーナに声をかけるとフィーナは心配が要らないと返事をするがノエルは慌てて返事をしたようで足元にあつた石を踏み、バランスを崩し、

「……ノエル、言つているそばから転びそうにならないでくれ」

「す、すいません」

ジークはノエルがバランスを崩した事に気づき手をのばして彼女を支えるとノエルは申し訳なさそうに頭を下げるがフィーナの表情は不機嫌そうに頬を膨らませており、

(……面倒だな)

ジークはシルドにも話した通り、フィーナが自分に好意を寄せているのは気づいているため、彼女の反応に肩を落とすが、彼女の行動に何かを言つ権利は自分にはないと思つてゐるため、言いたい言葉を飲み込むと、

「行くよ。遺跡の奥もどうなつてゐるかわからないし、あまり時間も無駄に使うわけにもいかないんだ」

「は、はい。」迷惑をおかけしてしまいます

ノエルを支えていた手を放すともう一度、先頭に出て足元をランタンで照らしながら歩き始める。

「ねえ。ノエル、暗闇を照らす魔法とかつてないの？」

「えーと、魔法はあまり得意ではないので」

「やうなの？ それなら、ノエルって前衛？ でも、これと言つた武器を持つてないよね？」

ジークの後ろを歩いていたフィーナはランタンの灯りでは歩きにくいためかノエルに何か魔法はないかと質問をするとノエルはフィーナの質問に申し訳なさそうに魔法は苦手だと言つとフィーナはノエルの装備が前衛で身体を張つて戦つよつた装備ではないため、首を傾げるとノエルは居心地が悪そく肩をすくめ、

「……俺はここまでノエルが付いてきたから、なるべく考えないようにしていたんだけど、運動神経も『ない』だろ？」

「は？ ジーク、何をおかしな事を言つてるのよ？ ノエルはドレ
イクよ。最高種の魔族様よ。それが運動神経がないなんてあるわけ
がないでしょ」

「あつ……あ、あの。フィーナさん、ジークさんの言つ通りなんで
す」

ジークはノエルの様子からあまり考えたくはなかつたのだが、どうし
ても確認しないといけないと思つたようであり、ノエルに聞くとフ
ィーナはジークにバカな事を言つたと言つたが、フィーナのその言葉で
ノエルはさらに居心地が悪そうな表情をするが、言わなければジーク
とフィーナがまたケンカになると思つたようで小さな声でジークの
言葉を肯定し、

「はい？」

「……やつぱりな

「ちよ、ちよっと待つて。ノエルはドレイクでしょ？ それなのに
魔法もダメ、運動神経もなにってぢつ言つ事よ？ 説明してよ！…」

フィーナはノエルの言葉の意味が理解できないようで首を傾げるが
ジークは大きくため息を吐くと、フィーナは慌ててジークとノエルに
聞き返す。

「説明しても何もないだろ。言葉の通りなんだから、それには人には向き不向きがあるんだ。仕方ないだろ」

「仕方ないじゃないわよー！ それじゃあ、これから、おにも……」

「……フイーナ、それは言つな」

ジークはフイーナの勢いに怯んでしまったノエルを自分の背中の後ろに匿うとフイーナは信じられないと言いたいようで勢いでノエルを『お荷物』と言おうとするがジークはその言葉を遮り、

「……そつね。ゴメン」

「い、いえ、あの。申し訳ありません」

フイーナは自分が言おうとした言葉がノエルを傷つける事を理解出来るために、言葉を飲み込みノエルに謝るとノエルは自分が悪いと思つているようで申し訳なさそうに頭を伏せ、

「さてと、どうするかな？ このまま遺跡に行つても危ないだらうし、一度、戻るか？」

「そ、そんな、わたしのせいであれ以上、じ迷惑をかけるわけには

「でも、実際は戦えないノエルがいるのは危険だし」

「だ、大丈夫です。攻撃魔法も前で戦う事もできませんが支援魔法

と回復魔法は少しだけできます

ジークはノエルを店に戻した方が良いと思ったようすで一度、戻ろうと言ひがノエルはこれ以上は迷惑をかけられないと言い、それでもいくつかの魔法は使えると言つと、

「何で、攻撃魔法は覚えなかつたの？」

「それは当たると痛いですし、ケガしちゃいますから、誰だつて痛い思いをするのはイヤです」

フィーナはノエルの魔法の選択に偏りがありすぎると思つたよつたため息を吐くとノエルは彼女の心優しい性格のせいであり、

「……なんか、治療薬を作るために動物の身体の一部を集めている自分が酷い人間に思えてくるな」

「……言わないで、それを言つたら、私は自分の名声のためにノエルを同じ考え方を持つている魔族を殺そうとしていたのよ」

ジークとフィーナは罪悪感を覚えたようであつ、ノエルから視線を逸らす。

「あ、あの。ダメでしょうか？ 遺跡に行くのはわたしのわがままなのにジークさんやフィーナさんが危険なところに行くのにわたしは何もしないでいる事なんかできないんです。ですから、お願ひします」

「……どうする？」

「……どうする？ って言われてもね。実際、ここまで流されてこの場所に来ている私とジークよ。答えなんて決まっているでしょ？」

「……だよな」

ノエルは深々と頭を下げてジークとフィーナに遺跡に連れて行って欲しいと頭を下げる。ジークは答えをフィーナに丸投げしようとするとがフィーナはジークにここまできた経緯を思い出せと言つヒジークは苦笑いを浮かべ、

「わかつたよ。元々、そんなに危険な遺跡でもないし、ノエルがいても大丈夫だと思うし、その代わり、奥の方は情報がないから、俺かフィーナがノエルを連れて行くのは無理だと思ったら今日は帰る。それで良いな？」

「は、はい。お願ひします」

「まあ、仕方ないわね」

ジークはノエルが同行する条件を決めるとノエルは深々と頭を下げ、フィーナはノエルの様子に苦笑いを浮かべると、

「それじゃあ、行きましょうか？」

「そうだな……後、ノエル」

「は、はい！ なんでしょうか？」

「痛いのはイヤって言うのもわかるけど、自分が危険になつたら、攻撃はしないといけない。動物は人を襲う時がある。彼らは生きる

ために人を襲うんだ。そして、人は生きたいから、戦う。それを理解してくれ。ここに情はかけちゃいけないんだ」

「わ、わかりました」

フィーナは改めて出発しようと言つとジークは頷きながらもノエルに向かい戦うと言つ事は必ず必要になつてくる事だと真剣な表情をして言うとノエルは先ほどまでと表情の違うジークに少し驚いたようで慌てて返事をする。

「……ここが新しい遺跡ね。何があるのかしら？」

「……フィーナ、一人で行くな。だいたい、灯りもないのに覗いたつて何もわからないだろ」

「わかつてゐるわよ。それでも雰囲気つてのがあるでしょ」

元々、平和な村で周辺に出現する魔物達も大人しいため、特に何事もなく新しい遺跡の入口まで到着するとフィーナは遺跡の入口に立ち、表情を険しくするがジークは彼女の行動にため息を吐くとフィーナは頬を膨らませて反論する。

「一応、少し入った冒険者達が言つには魔物達はあまり変わらないけど、中に特殊な能力を持つていてる亞種がいるような事も行ってたから、2人とも気をつけろよ」

「は、はい」

ジークはシルドの店で少しは遺跡の情報を聞いていたようでノエルとフィーナに注意するように言つとノエルは大きく返事をするが、

「わかつてゐるわよ。だけど、たかだか、この辺の魔物でしょ。私とジークが居れば問題ないわよ」

「……フィーナ、お前と組んだ冒険者が次は誘いたくないって言う理由がわかるぞ」

「フィーナは何も心配ないと言い、ジークはフィーナの冒険者としての噂も聞いているようだため息を吐くと、

「何よ?」

「……いや、ある程度、冒険者を始めればパーティーって出来上がつてくるものなのに未だにフリーなお前の評価だよ。考え足ららずで突っ込んでパーティーを危険に導くつてな。冒険者で生計をたてたいなら、人の話を聞く事を覚えろよ」

「私が悪いんじゃないわよ。危険かも知れなくとも飛びこまないと何もわからない事だつてあるでしょ」

フィーナはジークのため息に不機嫌そうな表情をし、ジークはフィーナの自分勝手な性格は冒険者として致命的だと言つがフィーナは自分には自分の考えがあり、今までの仲間達はそれが理解できなかつただけだと言い切り、遺跡の奥に歩いて行こうとする。

「……それをやるのは不器用でガサツなお前じゃない

「何よ! ? 放しなさいよ! !」

ジークは灯りを持たずに一人で遺跡の奥に進んで行こうとするフィーナの首をつかむとフィーナは当然、感情でジークを怒鳴りつけるが、

「遺跡の中にはトラップがあるんだ。お前に突っ切られてたまるか

「何よ? 入口あたりは他の冒険者が入ったんじょ。それなら、安全じゃない」

「……お前も冒険者なら頭に止めておけよ。トラップには魔法的なものがあつて解除されても自動で戻るものがあるって、こりはそれだ」

ジークは彼女の迂闊な行動にため息を吐くと今からトラップを解除すると言つて辺りを調べると、

「……これだな。本当なら魔法で根本から解除できれば良いんだけど、そんな魔法は使えないからな」

「これがトラップですか？ ジークさん、これを解除できるんですか？」

岩肌の壁の足元には小さなくぼみがあり、ジークはその近くにランタンを置くと荷物から小さなナイフと言つた小道具を取り出してトランプの解除に入るとノエルはトラップ解除など見た事がないようでジークの後ろから興味深そうに彼の作業を覗き込み、

「ノエル、ちょっと、ランタンを持って手元を照らしてくれるか？ フィーナ、一応、警戒していくてくれ。魔物が襲つてこないとは限らないからな」

「は、はい。わかりました」

「わかつてゐわよ。それくらい」

ジークはノエルとフィーナに指示を出すがフィーナは機嫌が悪そうに返事をしながらも周囲の警戒を始め出す。

第19話

「……トリップを解除すれば……」

「今、カチって音がしましたね」

「……ああ、解除できたみたいだな」

ジークはトラップ解除を行つているとトラップはカチッと言つ小さな音を立て、ノエルはその音に声をあげるとジークはトラップを解除できたと言つて立ち上がり、

「フィーナ、終わつたからもう良いぞ」

「ええ……」

ジークは周囲を警戒していたフィーナに声をかけるとフィーナは頷くが何かあるのか歯切れが悪く、

「どうかしたのか？」

「ん？ 何か、おかしな気配がするんだけど、何もないのよね。奥の遺跡に入つてからずっと見られているような感じなんだけど、そこに行つても何もないのよ」

ジークはフィーナに何か気になる事があるのかと聞くとフィーナは先ほどから見られているような気配がすると言つ、

「な、何かいるんですか？」

「……そんな気がするのよ。でも、これと黙つて何もいなし、ジークは何も感じない？」

「……確かに言われてみればそんな気もある。それも一つじや無く複数の気配、フィーナは確認してきたんだよな？」

ノエルはフィーナの言葉に身を守るようにジークの背後に隠れると、フィーナはこの気配があるから警戒を解きにくるようであり、険しい表情でジークには何も感じないかと言つとジークは目を閉じ、周囲の気配に集中するとその気配は一つではないと言つとフィーナは頷く。

「さうなのよ。それで気配のサイズから言えばたいした強さの魔物でもなさそうだし、気にしなくて良いとは思うんだけど……」

「一先ずは気にしても仕方ないだろ。この状況じゃ何も言えないし、敵意もなさそうだろ」

「ええ」

フィーナもどうするか迷つているようで頭をはつきりさせたいのか、乱暴に頭をかくとジークは気配の感じから敵意はないと判断したようで閉じていた目を開くとフィーナは考えるのが面倒になつたようでジークの意見に頷き、

「行きましょう。一先ずは通路はそれなりに広そうだけば、どうする？ ジークの武器を考えれば私が先頭で行く？」

「……いや、やつをも言つたけど、お前はトラップ感知とか向かな

いから遠慮する。ノエルを後ろにすると何かあつたら困るから、俺、ノエル、フイーナの順で進もう

「……わかつたわ。ジーク、ノエルの歩く速さにびびると合わせなさいよ

「わかつてゐよ」

ジークとフイーナは警戒したまま先を進む事を選ぶと遺跡を歩く順番を決め、

「ノエル、行くぞ。ここからは足元が今より悪くなるかも知れないから、気を付けてくれよ」

「は、はい。気を付けます」

「それじゃあ。行くか？ フイーナ、後ろからの警戒を頼むぞ」

ジークは改めて、ノエルに足元に注意するように言い、フイーナには後方の警戒を頼み遺跡に1歩足を踏み出そうとするが、

「わかつてゐわよ。それより、ジーク、あんた、私を後ろにしたんだからあんたがトラップにかかるとかは止めてよね」

「……気を付けるよ」

フイーナは冒険に対しての好奇心は人一倍あるようで面白くなさそうにジークに言い、ジークはフイーナの様子に苦笑いを浮かべる。

第20話

「……ノエル、フィーナ、止まってくれ

「ジークさん、どうかしたんですか？」

しばらく、歩いているジークは向に気づいたよう立ち止まり、後ろを歩いている2人を静止する。

「ジーク、何があった？」

「……ああ。あれ」

「……いるわね。それもうじゅうじゅうと

フィーナはジークに何があったかと聞くとジークは声を抑え氣味にして遺跡の奥を指差すと奥にはゴブリンと呼ばれるあまり強くはない魔族が4匹ほど先を歩いており、フィーナはその様子を見て表情を引き締めると、

「……どうする？ 仕掛ける？」

「……ノエルがいるし、戦闘にならないこした事はないんだけど

ゴブリンは先を急いでいるようで振り返る事はなく3人には気づいていないようであり、フィーナは後ろから不意打ちを喰らわせるかと聞くがジークは争いを好まないノエルがいるため、仕掛けで良いものか悩んでいるようで頭をかいだ時、

「な、何ですか！？」

「……ねえ。奥に凄いのいる？」

「かもな」

遺跡の奥からは大きな唸り声が響きだし、ノールは突如聞こえた唸り声にジークの背中に隠れて聞き、ジークとフィーナは今までこのような唸り声は聞いた事がないようで眉間にしわを寄せる。

「……『ゴブリン』程度ならどうでもなるんだけどね。『ドリゴン』とか眠つたら、どうすの？」

「ないない。あり得ない。こんなとこ……引き返すか？」

「……そうね」

フィーナは先を歩いている『ゴブリン』はジークと2人でなら倒せると言い、冗談交じりで奥にいるのがこんな平和な村に『ドリゴン』とか恐ろしい魔物がいたらどうしようと言い、フィーナの冗談をジークが否定した時、遺跡の奥が赤々と光りを放ち、一緒に大きく息を吐き出すような音が聞こえ、ジークとフィーナは『冗談で言つた事が現実にあるのではないかと思い、奥にいる物を何か確認せずに帰ろうかと言つたが、

「ドリゴンさんですか？　お話を聞いて貰えないでしょうか？」

「……あ、あの。ノエルさん、どうして、そんな答えに行きつづくですか？」

ノエルは首を傾げながらドリゴンと話をしてもみたいと言ふ。葉にジークは顔を引きつらせる。

「どうしてと言われましても、ドレイクはドリゴンの言葉を理解できませんから」

「や、そうだとしてもね。話にもなりずに炎のプレスとかを放たれたら終わつよ」

ノエルはドレイクである自分はドリゴンとも話ができると言つが、フィーナは流石に無茶があると言つが、

「……流石に無茶だと言つたけど、ん？ なあ、フィーナ、わざのを見て俺達は勝手にドリゴンがいるかもと言つたけど、本当にドリゴンがいると思うか？」

「何が言つたのよ？」

「いや、今までこの辺にドリゴンがいるって話は聞いた事ないよな？ 遺跡の奥で眠っていたとしても昔からいたなら、伝承でも何でもあるだろ？」

「確かにそうよね？ なら、さつきの向よ？」

ジークはノエルの言葉を否定しようとするが実際は奥にドリゴンがいるつてのは考えられないと言ふ。フィーナは少し冷静になつたようでジークの言葉に頷くとそれなり、先ほど赤々と光つたのはなんだと言つ。

「……調べるしかないよな？ ここまできて手ぶらでは帰れないし、何がいたかの情報でも買って貰えるかも知れないし」

「……あんたも今までジーピーでたくせにその答えなの？」

ジークは光の正体がわからないなら、確かめるしかないと言つがフィーナはジークの変わりようにため息を吐くと、

「それに先行していたゴブリンが戻つてこない。あまりに強力な何かがいるなら、逃げてくるはずだ」

「……逃げるまでもなく全滅つてのは考えないの？」

「えーと、確かにそれもありそうですね」

ジークは何かが引っかかり始めたようで自分達の前を歩いていたゴブリンが帰つてきないと言うがノエルフィーナは「ゴブリンはすでに全滅している可能性だつてあると言つが、

「それなら、俺1人で行く。様子を見て戻つてくるから、2人はここで待つてくれ。で、ある程度、時間が経つても戻つてこない場合は遺跡から出るんだ」

「そ、それはダメです！？ わたしが無茶を言つたんですから、偵察ならわたしが」

「……ノエル、それは酷く不安だから、ジーク、ここで時間つぶし

てるなら行つてよ。あんまり時間が経つと他の冒険者たちがくるわよ」

ジークは引っかかっているものの正体を確認したいようで自分に何かあつた時の事を2人に話すがノエルもフィーナもジークの言ひ事を聞く気はなく、

「……何かあつても知らないぞ」

「だ、大丈夫です」

「まあ、こう言ひ時のジークの勘に賭けるわよ」

ジークは2人の様子にため息を吐くがノエルは両手を握りしめて気合を入れ、ノエルは幼なじみジークの勘を信じてみると言い、3人は遺跡の奥を今まで以上に警戒して進み始める。

「……やっぱり、おかしいな」

「何がですか？」

3人は先ほど、ゴブリンが立っていた位置まで歩くとジークは小さな声でつぶやくとその声をノエルは聞き逃さなかつたようでジークの服をつかむと、

「いや、あの赤い光が仮にドラゴン、もしくは高位の炎の魔法だとしたら、ゴブリンはこの先で焼け死んでいる可能性が高い。全滅はないにしても1匹くらいは逃げ遅れるだろ？ それなのに肉が焼ける臭いがしない。風は奥から流れてるのにだ」

「まあ、確かに道も狭くなつてきてるし、ゴブリン程度に後れを取る相手だつたら別だけどそうね」

ジークはランタンからひつそくを取り出して空気の流れを確認すると、かすかではあるが奥の方からジーク達が入つてきた方向に風が流れしており、そこから、ゴブリンが焼け死んではないと言つとフイーナは歩いている通路が狭くなつてきている事に気づき、眉間にしわを寄せ、

「まあ、そうなるとゴブリン達に遺跡のお宝を取られる前に先に進みたいんだけど」

「せう言つな。問題はこの先なんだから、風の流れがどこかで変わつていて臭いがここまで届いていない可能性だつてあるんだからな

「ええ、せうじやない事を祈りましょ。ノエル、行くわよ」

「は、はい」

フイーナは遺跡の奥にあるであろう間に期待しているようで少し前のめりになりそうになるがジークはひつそくをランタン内に戻して警戒をしたまま、先に進もうと言い、フイーナは駆け出したい気持ちを抑えて頷き、ノエルに声をかけると彼女は大きく頷く。

第22話

「……それじゃあ、覗いてみるか

「気、気を付けてください」

赤々と光つた辺りまで歩くと道は左曲がりの下がるような通路になつており、ジークはギリギリまで歩くと通路を覗き込むが、

「……一先ずは何もないな」

「やうなの？ どうする？ しばらく待つてみる？」

通路の奥をランタンで照らしても通路が続いているだけであり、フイーナは「」の先をじつするかとジークに聞く。

「ノエル、ドラゴンの気配とかつて感知つてできないのかな？ ここから声をかけたら反応があるとか？」

「えーと、一先ずはドラゴンの気配はないんですけど、ドラゴン語で話してみますか？ 今の通路の奥まで聞こえる声だと相当な大声で叫ばないといけませんけど」

「……いや、それはドラゴン以外にも気付かれるから止めておこう。つてなると進むしかないか？」

ジークはノエルに「ドラゴンにコントクトを取る方法はないか」と聞くとノエルは奥にドラゴンが住まっている事を仮定するとかなりの大声を張り上げなければいけないと言い、ジークはノエルの意見を一

先ず保留にするとランタンで通路の先を照らし、覚悟を決めるように深呼吸をした時、

「ノエル、フィーナ、戻れ！！」

「な、何よ。突然！？」

ジークは何かを感じ取ったようでノエルとフィーナを曲がり角に戻すとフィーナは驚きの声をあげるがジークは2人をかばうように覆いかぶさると先ほどまで3人が立っていた場所へは赤々とした炎が見える。

「か、間一髪か？」

「そ、そつかも」

ジークは炎が見えた事で顔を引きつらせるとフィーナもここから先是流石に不味いと言いたげに顔を引きつらせが、

「あ、あの。ジークさん、フィーナさん、今の炎、たぶん、幻術だと思います」

「げ、幻術？　ど、どうしてそんな事が言えるんだ？」

ノエルは2人と違う答えに行きついたようであり、炎は幻術だと言い、ジークはノエルの言葉が信じられないようで声を裏返して聞き返すと、

「えーと、最初にこの遺跡の奥に入った時にジークさんとフィーナさんは何かおかしな感じがするって」

「ええ、そうだけど、それが直ぐに幻術には繋がらないでしょう？」

「そりなんですけど、それでわたしもその気配に集中していたんですけど……」これついたずら好きの妖精さん達の仕業ではないでしょうか？」「

ノエルはこの遺跡の中に入つた時から感じる気配に関係していると言つとフィーナは首を傾げるがノエルは予想でしかないと言つたげに妖精がいたずらをしているのではないかと言い、

「待てよ。妖精のいたずらって割には派手すぎだろ」

「で、ですけど、この遺跡つて長い間、発見されてなかつたわけですよね。壁で入口が埋まつっていたわけですし」

「ちょっと待つて。ノエル、それつてさ……久しぶりの来訪者に妖精達が張り切つているつて事？」

ジークはノエルの言う妖精のいたずらにしては悪質すぎると言おうとするがノエルは今の遺跡の状況からすでに答へは確信に変わってきたようで苦笑いを浮かべ、フィーナは彼女の様子を見て、ノエルの予想の終着点に気づいて眉間にしわを寄せる。

「いやいや、そんなオチつてあるのか？」

「ジーク、ノエルの言う事が本当なら妖精に失礼よ」

「……失禮で良いだる」

ジークは眉間にしわを寄せると言つて良いかわからなによつて
であり、

「でも、仮にそうだとしても実際問題、この中に突つ切れるのか?
ノエルを疑うよつに聞こえるかも知れないけど確証がないわけだ
しな」

「確かにね。まだ、可能性の問題なんだし」

ジークとフイーナはまだ妖精のいたずらとは思えないようで先を進
むのをためらつていると、

「大丈夫です。行きましょう」

「ちょ、ちょっと、ノエル、待つて!?」

「ノ、ノエル!?」

ノエルは問題ないと言い、通路に出るとジークとフイーナはノエル
を止めよつとするが、その時、ノエルに向かい赤々とした炎が襲い
かかり、

「大丈夫です」

「ほ、本当だな」

「幻術か？ 私もジークも魔法を使えないから、ノエルがいて良かつたのかな？」

炎が消えるとノエルは笑顔で立つており、ジークとフイーナはノエルの周りまで歩いて彼女にケガがないか確認するが彼女の身体や服はどこも焼けていない。

「……何か、納得はいかないんだけど、先には進めるし、行くか？」

「そうね」

「はい。行きましょう」

ジークは眉間にしわを寄せながら先を進むと言つとフイーナもジークと同じく納得しきれていないようで眉間にしわを寄せているがノエルは役に立てた事が嬉しいようで笑顔で返事をすると、

「……お、おう」

「……ジーク、あんた、何、考えているの？」

「な、何も考えてない！？ い、行くぞ！」

ジークはノエルの笑顔に一瞬、目を奪われ、ジークの反応にフイーナは不機嫌そうにジークに聞くと彼は変に詮索される事を避けたい

ようでランタンで足元を照らしながら歩きだし、ノエルとフィーナはジークの後に続いて歩きはじめ、

「なあ。ノエル、妖精達の気配で何かわかるか？ おかしな幻術で道があるところに道がなくて、道がないところに道があつたら困るから」

「……本当に困るわね」

「ジ、ジークさん！？ だ、大丈夫ですか！？ み、見せてください。今、治癒魔法を使いますから」

ジークはノエルに妖精達のいたずらのある場所がわかるか聞いたところでなかなか良い音が響き、ジークは額をぶつけてあまりの痛みに両手で額を押さえてうずくまり、ジークの様子にフィーナはため息を吐き、ノエルはジークを心配するようにジークに駆け寄り、ジークの治療をすると言うが、

「だ、大丈夫。この程度なら治癒魔法をかけて貰うまでもないから、それより、どこに通路があるかわかるか？」

「あ、はい……」

ジークは頭を押さえながらノエルに治癒魔法は必要ないと言うと行き止まりに来てしまったため、ノエルに魔法で通路を探して欲しいと言つとノエルは返事をした後に気持ちを落ち着けるために大きく深呼吸をし、妖精達の魔力が強いところを探し始め、

「これはノエルがいなかつたら、あんた、何もできなかつたわね」

「確かに……笑うな」

フィーナはノエルが一緒に先に進めると言うとジークは領きた
がら持ってきた塗り薬を額に塗るとフィーナはあまり見ないジーク
の姿に笑いをこらえており、ジークは少し恥ずかしいようで不機嫌
そうに彼女から視線を逸らす。

「……ジークさん、フイーナさん、たぶん、ですけど、こっちに道があります」

「ノエル、一人で行かないでくれ。灯りがないと転ぶぞ」

「そ、そりですよね。す、少し、興奮してしまいました」

ノエルは妖精達の様子から道がある方に進もうとするがジークは彼女を引き留める。

「それじゃあ、戻るか？　あれ？　そう言えば、先を歩いていたゴブリン達はどうしたんだ？　あれも妖精達のいたずらだったのか？」

「ゴブリンにも魔法を使うのがいたんじゃないの？　えーと、確か、ゴブリンの上位種に魔法を使うのがいたような」

「……そう言えば居たな。と言つたが、厄介だな」

ジークはランタンを手に先頭に立つと3人で歩き出し、ゴブリンにも魔法を使うものがいた事を思い出して表情を引き締める。

「ジークさん、そこです」

「いい？　……ホントだ。何か不思議な感じがするな

「そりね」

しばらく、歩くとノエルがジークを引き留めて遺跡の壁を指差し、ジークはその壁に手を伸ばすと手は壁の中に消えて行き、3人は今までになかった感覚に苦笑いを浮かべて顔を見合わせ、

「それじゃあ、行くか？」

「は、はい」

「ここの奥には何があるかしら」

3人は大きく頷くとジークを先頭にして壁をすり抜けて行く。

「広いな……」

「な、何ですか？」

「灯りが点いた？」

ジークはランタンで通路の奥を照らすと通路は先ほどまでの通路より広く、ジークは息を飲んだ時、通路には灯りが付いて行き、

「……招かれてるのか？」

「……おかしな者がいないと良いけどね。ゴブリンにも魔法を使うのがいるかも知れないから戦う事になると厄介だし」

通路に自然に灯りが点いた事にジークはこの先に何があるか予想が付かないようで冷たい物が背中を伝い、フィーナも同じ意見のようで頷ぐが、

「ジ、ジークさん、フィーナさん、凄いです。これで足元も確認できますから安心して先を進めますね」

「……」「…

ノエルは灯りが点いた事が嬉しいようで笑顔を見せて通路の壁の灯りを覗き込み、そんな彼女の様子に苦笑いを浮かべる。

「まあ、行つてみないと何もわからない……ノエル！…」

「は、はい！？」

ジークは先を進もうとした時にジークは何かに気づき、ノエルの名前を呼ぶと彼女の手をつかみ、ノエルを自分の元に引き寄せた時、

「きたわね」

「そう言つ事だ」

ノエルが立っていた場所を小さな火球が襲い、フィーナは剣を抜き、ジークはノエルから手を放すと彼女を庇うように立ち、1対の魔導^{キャリバ}銃を構える。

「ジ、ジークさん、な、何があつたんですか？」

「何があつたって俺達を邪魔だと思う奴がいるわけだろ」

「そう言つ事よ」

ノエルは何があつたかわからないようでジークの服をつかみ、不安

そうな表情をするとジーグとフィーナはノエルに向けて火球を放つ
た者がいるであろう通路の先に視線を向けると、

「……」

「……言つてるそばからかよ」

「そうみたいね」

先ほど見たゴブリン4匹がジーグ達に敵意をこめた視線を送つてお
り、ジークとフィーナは表情を引き締める。

「……距離がある上にノエルは攻撃魔法はなし、フィーナ、ノエルの事を頼むぞ」

「了解」

魔法を使つ「ゴブリンは1匹のようで3匹のゴブリンがジーク達に向かい駆け出してくる姿にジークはフィーナにノエルの警護を任せて駆け出して行き、

「ジ、ジークさん！？ フィーナさん、ジークさん一人で危なくな
いんですか！？」

「ノエル、ジークの心配してるヒマがあつたら、きちんと前を向く

「は、はい！？」

ノエルは1人で駆け出して行つたジークを追いかけなくて良いのか
と言つがフィーナはジークの心配より、自分の心配をするように言
う。

「……魔法を使う奴は流石に遠いか」

ジークは3匹のゴブリンの前に着くと1匹のゴブリンが装備をして
いた斧をジークに振り下ろし、ジークは落ち着いているようで難なく、その攻撃を交わし、魔導銃キャリバーの引き金を引くと銃口から光が放たれ、1匹のゴブリンの肩口を撃ち抜き、ゴブリンは痛みに悲鳴を上げ、他の2匹のゴブリンは仲間が攻撃を受けた事にジークへの殺意

をあげる。

(……斧、剣、槍か？となると少し距離を取りたいけどあまり距離を取りたいけど、これがあるからな)

ジークは3匹のゴブリンの武器を確認し、自分の武器である魔導銃との相性を考えて、3匹との距離を2メートルほど取り、魔導銃を（キャリバー）を構えた時、後ろにいる魔法を使うゴブリンからジークへ向けて火球が放たれ、ジークが火球を交わすのを狙っていたようでジークに向けて槍が突き出される。

「連携を使ってくるのかよ。思つていたより、厄介だな」

しかし、ジークは慌てる事なく、魔導銃の引き金を引き、槍を装備しているゴブリンの腕を撃ち抜くと槍の軌道は逸れ、

「一先ずは連携を切らせて貰いつ

ジークは着地と同時に足に力を込めて地面を蹴り、踊るように3匹のゴブリンの間を駆け抜けると3匹のゴブリンの足を撃ち抜いて行く。

「ジークさん、お強いんですね」

「そりや、両親が化け物じみた強さだからね。その血を受け継いだ。

ジークは血統的に才能の塊よ」

ジークが4匹のゴブリン相手に優位に戦っている姿にノエルは感心したように声を漏らすとフィーナはジークがこんなところで負ける事など考えられないため息を吐く。

(……ノエルの考えを尊重してやりたいけど、説得つてできなさそうだよな。だいたい、言葉が通じないし)

ジークは3匹のゴブリンの足を撃ち抜き、移動力を削った事で戦闘を優位にした事でさらなる余裕が出て事もあり、ノエルの言う人間と魔族との共存を思い出すがゴブリン達は攻撃を緩める気はなく、痛みを堪えながらもジークに向けて攻撃を繰り返していると、

「ジーク、油断しないの。後ろのは魔法を使うんだから、治癒魔法も使ってくるわよ」

「わかってるけど、ノエル、ゴブリンって説得できないのか？」ノエルの話を聞いてると止めを刺すのは気が引けるんだよ

「あつ！？　は、はい。そうですね。あ、あの。わたし、ノエリクル＝ダークリードと言います。少しお話合いをしたいのですが」

ジークの様子にフィーナが油断をすると云つがジークはノエルにゴブリンの説得を頼めないかと言う、ノエルはゴブリンの説得に移るつもりである。

「……」

「ジーク」

「一先ずは話は通じてるみたいかな？」

ノエルの呼びかけにジークと対峙していた3匹^{キャラバ}のゴブリン達は顔を見合わせ何かを相談し始めたため、ジークは魔導銃を腰のホルダに戻すとゴブリン達を警戒しながらもノエルとフイーナの場所まで戻る。

「えーと、ジークさん、フイーナさん」

「ん？ わかつて貰えた？」

「……後ろのゴブリンさんから裏切り者って、言われました」

ノエルとゴブリン達との会話も終わつたようでノエルが2人を呼ぶが説得は失敗したようでノエルは残念そうに肩を落とし、

「……えーと」

「……バカジーク、あんた、何で戻ってきてるのよ？」

ジークはノエルの言葉に振り返り、ゴブリン達の様子を見ると回復魔法で治療を終えたのかゴブリン3匹はこちらに向かい駆け出してきている。

「い、命を助けたのに！？　この仕打ちかよ！？」

「……すこません」

ジークは慌ててホルダから魔導銃キャリバーを抜くと再度、ゴブリンの前に躍り出て3匹のゴブリンの突撃を止める姿にノエルは申し訳なさそうに頭を下げ、

「……今は、それどころじゃないかな。ノエル、悪いんだけど、あいつらの命を助けてやれる余裕はないわよ」

「は、はい……」

フィーナはジークとゴブリン達の位置を考えるとノエルにも攻撃の手が来る可能性もあるため、短期決戦に持つて行こうと判断したようでジークの隣に駆け出して行く。

「フィーナ、いい、任せても良いか？」

「何？　考えでもあるの？」

「……やる気があるのはたぶん、後ろの奴だけだ

「……やっぱ。わかった。って、返事くらい聞きなさいよ！？」

ジークはフィーナが駆け付けてきた事で何か考えがあるのかこの場所を任せるとひとつとフィーナの返事を待たずに彼女にゴブリン3匹を任せて後方にいる魔法を使用するゴブリンに向けて駆け出して行き、

「まったく、ノエル、ジークが分からず屋をぶつ飛ばしてくる氣らしいから戦闘を長引かせるわよ。そうすれば、こっちの3匹は助けられるかも知れないから、だから、支援魔法、防御力か回避力に関係ある魔法があつたらお願ひ」

「は、はい。わかりました」

フィーナは襲いかかってくる3匹のゴブリンの攻撃を剣で弾き返しながら、ノエルに補助魔法を頼むとノエルは深呼吸をすると魔法の詠唱を開始する。

「まったく、ジーク、上手くやりなさいよ。あんた達も自分の意見くらい持ちなさいよ！！ こっちが引いてるんだから、ノエルの話を聞いてるんだから、後味の悪い戦闘なんかさせないでよ！！」

フィーナは後のゴブリンに従っているだけの3匹のゴブリンに一刀ついているようで怒鳴り散らすと剣を振りまわし、3匹のゴブリンの武器を弾き飛ばし、

「……ノエル、攻撃補助は私、頼んでないんだけど」

「す、すいません！？ ま、間違えました！？」

「……本当に魔法も得意じゃないのね」

「すいません……」

フィーナは自分にかけられた魔法が自分が頼んだものとは違うため、ノエルに声をかけると彼女は小さく肩を落として謝る。

「ちくしょう。ほんほんと魔法を放つなよな。距離が詰められないだろ」

ジークはフィーナに3匹のゴブリンを任せて魔法を使うゴブリンに向かい駆け出しているが、ゴブリンは接近戦ではジークに分があると思っているようで彼を近付かせないように魔法を放ち続ける。

「……このまま行けば、魔力は尽きたと思つけど、時間が長引くと……そりなるとフィーナが片付けまつよな」

ジークはゴブリンの魔力が尽きる事を計算に入れようとするがジーグは3匹のゴブリンの命は助けてやりたいようでため息を吐くと立ち止まり、

「……ここからは本気だ。説得に応じるまで付き合つて貰つや」

身体の先までに血液を送り込むために大きく深呼吸をして大量の酸素を肺に取り入れる。

「……壊れるなよ。相棒」

「！？」

立ち止まつたジークを見てゴブリンはジークに火球を放つがジークはその火球を魔導銃キャリバーで撃ち抜き、火球は大きな爆発を起こし、予想外のジークの行動に一瞬、ゴブリンは呆けるが彼はその爆発の中を前に進み、

(……まずは魔法の発動体である杖を)

「ゴブリンの田の前まで駆け寄ると魔導銃^{キャリバー}の銃身で杖を横に打ち払い、ゴブリンの手から杖を落とす。

ゴブリンはジークの攻撃に何があつたかわからないよう田を白黒させるがジークは行動を止める事ない。

魔導銃^{キャリバー}を持っていた手を切り返し、魔導銃^{キャリバー}持ち手の部分をゴブリンの肩に振り下ろすとゴブリンはその攻撃に反応する事はできず、

(……この感触は折れたか？まあ、殺されるよりはマシだよな)

魔導銃^{キャリバー}を肩に打ち下ろした音とともに何かがゴブリンの骨は折れたのか鈍い音が響き、ゴブリンは痛みに苦悶の表情を浮かべながら膝を付く。

ジークはゴブリンの様子と手に伝わる感触にゴブリンの状況を推測するとノエルと関わったからこそ感じる罪悪感に小さくため息を漏らすと、

「……言葉は通じていないと思つけど、降参してくれると助かる」

魔導銃銃口^{キャリバー}をゴブリンの額に押し当て言葉が通じないゴブリン相手でも命は奪いたくなこと言つて爆発ですすだらけになつた顔に苦笑いを浮かべる。

「……ハウサン？ ワレラトキサママラノアイダテソンンナモノガアルワケガナайдар」

「……あれ？ 話せるの？」

「……『ノノクライハトウゼンダ』

「やうなら、もう少し穩便にしてくれよな」

ゴブリンは降参する気はないようでジークを睨みつけるとゴブリンの口からは発音が多少異なるが人族の言葉が発せられ、ジークは話くらには聞いて欲しいとため息を吐くと魔導銃キャリバーを腰のホルダに戻す。

「……ナゼ、トジメヲササナイ?」

「ノエルも言つただる。俺達は戦フ氣はないの。お前は知らないけど、ノエルに泣かれると酷く悪い事をしている氣がするんだよ」

「……ドレイクサマーホレタカニンゲンノブンザイテ」

「……そんなんじゃない。それで、一先ずは話し合ハグにに乗つてくれ」

ゴブリンはジークがノエルを気にかけている事に一つの答えを導き出し、ジークは眉間にしわを寄せた。

「……あれだ。人族の使う薬草ってゴブリンに効果があるのか？」

「……正直、やり過ぎたとは思つてゐるわよ」

ゴブリンのリーダーはジークに膝を屈し、一先ずはノエルと話をしつつ、ジークはフイーナがぶつ飛ばしたゴブリン達の簡単な治療を始めているのだが自分の持つてゐる傷薬の効果が心配なようで首を傾げる。

「……イッパンテキナモノハコウカハアル」

「そりか？ それなら良いな。ノエルと……」

「『ギド』」

「フイーナ、魔香草を2人にやつてくれ

「了解」

ゴブリンのリーダーは話をする上で名乗らないのも都合が悪いと思つたようで『ギド』と名乗り、ジークは2人に使用した魔力を回復させる貴重な薬草を渡す。

「……ノエルさま、ノニンゲンハバカナノデスカ？」

「違います。ジークさんは優しいんです」

ギドは魔香草を受け取ると人族と敵対関係にあるはずの「ブリン」に治療を施し、貴重な治療薬を渡すジークに眉間にしわを寄せるがノエルはこいつに笑う。

「それで何ですが」

「……ロコマデジシリョクサヨミセシケラレテイノチヲタスケラレタノデス。コレイジヨウハナニモシマセン」

「ありがとうございます」

ギドはこれ以上の戦闘は無意味だと説得に応じてくれ、ノエルは深々と頭を下げる

「あのせ。ギド、この遺跡って何があるか知ってるのか?」

「……シラズニキタノカ?」

ジークはギド達は遺跡の奥に何があるか知っているのかと気になつたようで軽い口調で聞くと何も知らずにジーク達がここにきた事にギドはため息を吐き、

「……成り行きなんだよ」

「そうね」

ジークとフィーナはギドの呆れた様子に彼から視線を逸らす。

「……コレハオマエタチニシングンニワタスワケハイカナイモノダ。タチサレ」

「人間が持つてはいけないもの？あれか。聖剣とか魔剣の類で魔族を倒すために鍛えられた武器とか？」

「ジーク、何くだらない事を言つてるのよ。」こんな片田舎にそんな大層なものが眠つてるわけがないでしょ」

「……ソフトオリダ」

ギドの言葉にジークとフイーナは冗談交じりで魔族と戦うための武器があると言つとギドは2人の言葉を肯定し、ジーク、フイーナは顔を引きつらせるが、

「ジークさん、その武器なら、わたしの角を折れるんじゃないですか？ その武器をジークさんが手に入れれば角が生えてきたらまた折れば良いわけですし。」これで解決です 」

ノエルだけは呑気そうに奥に眠る武器を使えば村に残るために邪魔な角を落とす事ができると喜んでおり、

「……いや、ノエル、それは違うだろ。それもそんな大それた武器で簡単に言つな」

「……ノエルさま、ナーラオッシャラレテイルノデスカ？」

「せうなんですか？ だつて、ギドさん達が持つてて誰かに襲われて奪われたらまた戦いの火種になりますし、ジークさんの家で保管したい方が安全じゃないですか？」

ジークとギドはノエルの言葉に彼女の間違いを否定しようとするが

ノエルは何を考えているのか遺跡の奥に眠る武器を上田舎のジークの家で保管しようと言い始める。

第29話

「……あれ？ 僕がおかしいのか？」

「……いや、おかしいのはノエルだと思つわよ」

ジークは眉間にしわを寄せるとフイーナはおかしいのはノエルだと首を振るが

「みなさん、行きましょう」「

「ちょっと、ノエル！？」

「ノエルさま！」

「……一先ず、追いかけましょうか？」

ノエルはこれ以上の良案はないと思っているようで一人で歩きだし、慌ててジークとギドはノエルを追いかけ、フイーナはため息を吐くと残っていた3匹のゴブリンと一緒に遺跡の奥に歩いて行く。

「ギド、この先には行ったのか？」

「マダダ。イキナリ、アカリガツイタノデナ。ウシロヲフリカエルトオマエラガイタノダ」

「……侵入者を感じするものじゃなかつたのか？」

ジークとギドは直ぐにノエルを追いかけたはずだが、ノエルには追

いつく事ができず、ジークはギドに遺跡の話を聞くがギド達もまだ奥には足を踏み入れていなかつたと首を振り、

「なら、何に反応したんだ?」

「……ニンゲン、キヅイテイルカ? ドウヤラ、ノエルサマタチカラヒキハナサレタヨウダゾ」

「そうか。妖精達のイタズラ。忘れてた。ギドは気付けなかつたのか?」

「……ノエルサマノコトニキヲトラレスギタ」

ジークとギドは妖精達が見せていく幻術に魅せられている事に気づき舌打ちをして、

「ノエル達は合流していれば良いけどな

「……ニンゲン、ドウヤラ、ノエルサマタチノコトヲシンバイシテイルヨユウハナサソウダゾ」

「……まったく、嫌になるね。ギド、悪いんだけど、支援、頼む。あれだと俺の魔導銃^{キャリバー}で撃ち抜けるかわからないから」

「……ジョウキョウガジョウキョウウダ。シカタナイ」

ジークがノエルとフイーナの事を心配するように咳いた時、ジークとギドの前方から地響きを鳴らしながらジークの身長の倍くらいの大きさの石の人形が2人に向かってきており、ジークは腰のホルダから魔導銃^{キャリバー}を抜いて構えるとギドに援護を頼み、彼に石の人形の攻

撃が当たらぬよう前に駆け出し、ギドは杖を構えて魔法詠唱の姿勢に入る。

「……この攻撃を喰らつたら、骨は折れるよな

ジークは目の前の石の人形を見上げると攻撃を喰らった時の事を考えたようで顔を引きつらせるが、

「いきなりかよ！？ まだ、準備もできてないって」

石の人形の右手はジークを狙つて大きく振り下ろされ、ジークはその攻撃を交わす。

「……痛い。まあ、直撃を喰らうよりはマシだけビ、ずっと喰らうと流石に不味いぞ」

石の人形が叩いた地面からは石が飛び、小さな石のつぶでがジークを襲う。当然、ジークは石つぶてを交わしきる事はできず、ジークの顔には赤く小さな跡が浮かびあがる。

「……やつぱり、魔導銃じゃ、ダメージは小さいだろうしな。まあ、やれるだけはやるけどさ。ギド頼みだな」

ジークは石の人形の大振りな攻撃を交わしながら、魔導銃の引鉄を引くが魔導銃から放たれた光は石の人形の身体を撃ち抜く事はできない。

「……効いてる気がしないけど、どこか、弱点でもあれば良いんだけど」

ジークの予想通り、石の人形の身体は魔導銃の攻撃ではダメージを与えられない。

「……打撃は無理だよな？ 絶対に痛いし、魔導銃が壊れたら元も子もないし、何より、こいつは俺じゃ直せないからな。出費がでかすぎる」

ジークは魔導銃キャリバーで石の人形を殴りつける事も考えるが商売人でもある人間らしく直ぐに経費の計算をして赤字だと判断したようだ、

「ギド、いつまでかかる？」

「……ズイブントヨユウソウダナ」

後方で魔法の準備をしているギドに聞くとギドは焦躁感の見られなイジークの様子にため息を吐く。

「まあ、動き自体は速くもないからね。だけど、その分、1発貰うと終わりだ。早いうちに決めてくれよ」

「……ソウシタイトコロダガソイツヲハカイスルホドノマリヨクヲタメルノハジカンガカカル」

ギドは石の人形を破壊するには魔法の威力が不足しているため、時

間がかかるようであり、

「……それじゃあ、しばらくは頑張りますか？」

「……ソウシテクレ」

ジークはため息を吐くと石の人形の攻撃を交わしながら魔導銃の引鉄を引いて行き、

「一先ずは、単発で倒せないなら集中攻撃だな。狙うは右足」

魔導銃の攻撃では簡単にダメージは取れないため、1点を狙い打つ事に決めた時、

「当たれ！！」

「つて！？ フィーナ！？」

フィーナと3匹のゴブリンが姿を現し、フィーナは自分の剣では刃が欠ける事もあるからかゴブリンから斧を借りたようで石の人形の頭を殴り飛ばす。

「吹っ飛ばないか？ 硬いわね」

「待て、硬いの一言で終わらせるな！？」

フィーナは渾身の一撃だったようで石の人形の動きは止まったがダメージにはなっていないため、舌打ちをするとジークは驚きの声をあげるが、

「うつさいわよ。」うつむき相手がいるんだから、魔導銃とかじゃなく、斧とか槍とかにしなさこよ」

「やうじやないだろ」

フィーナは斧を構えて石の人形の前に立つとジークに武器を変更するように言つたがジークはため息を吐く。

「まあ、打撃系が居れば、大部、楽になるか」

「だから、そんなひ弱な武器じゃなくて」

「良いから、構えろよ。時間稼がないとギドの魔法が飛んでこないんだから、お前の攻撃だつてたいしたダメージはなかつただろ」

「魔法を使える仲間が欲しいわね。ノエルと何かするとしてもあるの子、攻撃魔法、使えないし」

ジークは魔導銃キャリバーを構えてギドの魔法まで時間を稼がないといけない事を伝えるとフィーナはゴブリンであるギドの魔法だよりと言つ状況に人間としてどうなんだと言つたげにため息を吐くが、

「フィーナ、ノエルはドレイクだから……フィーナ、お前達はノエルと合流してないのか？」

「……残念ながらそう言つた事、あの子一人は不味いから、ギド、急いでよ。ジーク、ダメージは少なくとも削るわよ」

「ああ」

「ワカツ テイル」

この場にノエルだけが集まつていない事に気づき、あまり時間はかけられない事に気づき、全力で石の人形に向かい攻撃を開始する。

「本当に硬いわね。ノエルの補助魔法があれば楽なのに」

「……いや、少なからず、石の人形のバランスを崩したり欠けさせ
るだけで充分な攻撃力だと思うぞ」

ジークとフイーナが攻撃を開始してしばらくするとフイーナは碎く
事のできない石の人形相手に舌打ちをするが彼女の1撃は重く、ジ
ークだけではダメージを与える事のできなかつた石の人形は所々か
け始めている。

「……怪力女」

「ジーク、あんた、何か言つた?」

「何も」

ジークは小さな声でフイーナをバカにするように咳くとその声は彼
女の耳にも届いており、ジークを睨みつけるがジークは平然と何も
ないと言い切り、

「大部、欠けてきたし、そろそろ、コアなんか見えてきたら嬉しい
んだけどな」

「コア? 何よ。それ」

「石人形を動かしてゐる命令系統。生物で言えば心臓と脳の合体した
物。あの石の人形はゴーレムって言う魔導人形だから、必ずあるは

「なんだよ

「まんま、弱点じゃないのよー? そんなものがあるなら最初に言
いなさいよー!」

ジークはフイーナの攻撃に欠けてきた石の人形の弱点が探し始める
が、

「そんな事を言つたつて見える部分にあるわけないだろ。まさか、
フイーナがあの硬い身体を欠けさせるなんて思わないだろ。流石に
まだ見えないか?」

「ジーク、それってビームあるのよ。そこを壊せば終わりなんでし
ょ」

「アらしき物は石の人形にはまだ見つけられず、小さくため息を吐
くとフイーナは時間が惜しいため、そこを狙うと斧を構える。

「わからないけど、普通に考えれば一番守りの堅い胸部分

「そう。そりつて心臓部つて事でしょ。まったく、無茶な注文をす
るわね」

「いや、別に狙えとは言つてないぞ。あいつを倒すのはギドの魔法
に任せあるし」

ジークは一番アラがある確率の高い場所を指差すとフイーナは口元
を緩ませるがジークはおかしなやる気を出しているフイーナを引き
留め、

「それよりは足を狙えよ。あの硬くて重い石の身体を支えてるんだ。
動けなくしちまえば、ギドの魔法も当たるだろ」

「何を言つてるのよ！… 決めたら一撃突破よ！…」

「待て！？ あんまり近づくとギドが魔法を撃てないだろ！…」

「斐ーナに狙いを足に変えるように言つうが斐ーナは石の人形に向かって駆け出して行く。

「つたく、だから、あいつの世話はイヤなんだよ。壊れるなよ」

ジークは舌打ちをすると魔導銃^{キャリバー}の出力を最大まで上げ、

「砕ける！！ 硬いわね！？」

「下がれ。斐ーナ」

斐ーナは石の人形の胸部を叩きつけるが胸部は欠ける事はなく、
石の人形の右腕が斐ーナに振り下ろされるとジークの魔導銃から
は先ほどまでは明らかに違う輝きの光が放たれ石の人形の右腕を
撃ち抜き、石の人形の右腕は粉々になり、

「……やつぱり、壊れたよ」

「ジーク、あんた、危ないわね！？ つて、そんな攻撃ができるな
ら、最初からやりなさいよ！…」

1対の魔導銃^{キャリバー}の片割れは煙をあげ、ジークは大きく肩を落とすが斐
ーナはジークの攻撃の威力に驚いたようで彼を怒鳴りつける。

「良いから、下がれよ。ギドの魔法の巻き添えになりたいのか？」

「う、うつさい。それくらい。わかつてゐるわよ」

ジークは銃身から煙をあげている魔導銃を腰のホルダに戻すと残っている魔導銃キャリバーを構えながらフィーナに下がらせ、

「何があるかわからないから、こつちは壊せないからな」

「わかつてゐるわよ。氣をつけねば良いんじょ」

ジークは魔導銃キャリバーが壊れた事はフィーナのせいだと言いたげであり、フィーナは少しだけ反省しているのか斧を握り直し、

「一先ずは右足？」

「腕の振りを考えると交わしやすいだろ」

「そうね。援護、よろしく」

2人は石の人形への攻撃箇所を右足に定めるとフィーナは地面を蹴り、石の人形に向かつて駆け出して行き、

「……そろそろ、決着をつけたいんだけど」

「そうね。流石にしんどいわ」

ジークとフィーナは石の人形の攻撃を交わしながら攻撃を続いているがコアが破壊されない限り動き続ける石の人形相手では2人の体力が続かず、2人の息が上がり始めた時、

「……イクゾ。ヨケロ」

「待つてたぞ」

ギドから火炎球が放たれ、2人は左右に別れて飛び火炎球は石の人形を襲う。

「命中と、これで片付いたわ……ねえ。ジーク」

「何だ？」

「この人形つて石よね？」

「そうだな」

ジークとフィーナは火が上がっている石の人形を眺めていると2人はその様子に何か不吉な事が思い浮かんだようであり、

「……石だと熱持つだけだつたりするよね？」

「そうだな。コアまで届かないとただ熱くなるだけかな？」

石の人形は赤々と熱をあげており、ジークとフィーナに向かってくる。

「「ギド！？」」

「……スマナイ。クダケナイトオモワナカッタ」

2人は確実に攻撃力の上がった石の人形に魔法を使つたギドの名前を叫ぶと、ギド本人も火炎球で石の人形を倒せると思っていたようで申し訳なさそうに視線を逸らし、

「ど、どうするのよ!! あんなに熱を持つてたら、打撃は効かないわよ。つて言つた、攻撃したら火傷するわよ!!」

「ど、どうするんだよ!!」

「ジーク、あんた、もう一発、最大出力で胸部を狙いなさいよ。コアを壊せばどうにかなるでしょ」

「壊れるだろ。修理する手立てもないんだぞ。こいつがないと商売あがつたりだ!!」

ジークとフィーナは言い合いを始めながら石の人形の攻撃を交わしており、

「……ヨユウソウダナ」

「「そんなわけない!!」」

ギドは石の人形の攻撃を交わし続けている2人の様子にため息を吐くと、2人は声を合せて叫び声をあげた時、石の人形は軋みを上げ始め、

「と、止まつた?」

「熱でコアがショートしたか？」

巨大な音を立てて石の人形は地面に膝を付くと前のめりに倒れる。

「……結果オーライ？」

「そんなところかな？」

「……ノエルサマラサガズゾ」

ジークとフィーナは動かなくなつた石の人形と少し距離をとつてみているとギドはこれ以上、ここにいるよりはノエルを探しに行くぞと言い、

「そうだな。ノエルの方もこんな感じだつたら大変だしな」

「そうね」

ジークとフィーナは頷き、ノエルを探しに遺跡の奥を手指数して歩き出す。

「……ギド、ノエルの居場所はわかるか?」

「……ワカツテイレバクロウナドシナイ」

石の人形を倒した後にノエルを探し始めてしばらくするが、妖精の悪戯により道を惑わされるためギド便りであり、ノエルを見つける事は出来ない。

「簡単に二手に分かれるって言つても、俺とフイーナで行くわけにもいかないからな」

「せうなのよね……やつぱり、魔法を覚える必要性があるわね」

「……そう思つなら、俺の肩を叩かないで自分で覚えろよ」

フイーナは今までの魔法をあまり重要視していないため、自分ではなくジークに魔法を覚えてほしいようだが、ジークは大きく肩を落とす。

「……オマエタチハヨウセイノケハイモカンジラレナナイノカ?」

「氣配くらいは感じられるけど、魔法は使えない」

「ソウカ? ソレナラバサイノウハアルカモシレナイナ」

ギドはジークとフイーナに妖精の氣配を感じられるかと聞くとジークの答えに少し考え込むような素振りをすると、

「……サイノウガアルナラタメシテミロ。サガセルモノガフエルナラ、ノエルサマヲハヤクミツケルコトガデキル」

「試してみるつて言つてもな。具体的に何をしたら良いか。わからぬいし」

「それに仮に私とジークが妖精の魔法を突破できても単独行動は危険でしょ。さつき見たいなのでできたら一人じゃ無理だし」

ギドはジークとフイーナの事を高く評価しているようで簡単に妖精の魔法を感じてみると「言つがジークとフイーナは簡単にできる事では思つていなため、首を横に振る。

「マホウハサイノウダ。『テキナイモノハドレダケドリヨクシヨウガデキナイ。スクナクトモオマエタチハマリヨクラカンチデキル。ソレニ、スクナクトモ、オマエタチハヒトリ『モサツキノモノガデテキテモニゲキルコトハデキルダロ?』」

「まあ、動きも遅いし、逃げるだけなら……さつきも無理に戦う必要つてなかつたんじやないか?」

ギドの言葉にジークは魔導銃キャリバーを壊してまで戦う相手ではなかつたと思つたようで大きくため息を吐くと、

「とりあえず、やるだけやつてみるが、ノエルだと逃げる事もできなさそうだ……と言つが、石の人形みたいな魔導人形は言葉なんか通じないので話し合いで解決しようとずっと話しかけてそつだから、時間はないだろ?」

「……否定できないのが痛いわ

「……ソレニカンシテハドウイケンダ」

ジークはノエルを探す手掛かりになるならギドの提案に乗るがその理由にフィーナとギドは眉間にしわを寄せる。

「ジカンガナイ。カンタンニセツメイスルゾセントウニツカウワケデモナイ。マリヨクヲカンチスルノハデキルナ？」

「ああ。そこにも魔力の高いところがある」

「……マリヨクガタカイカショハヨウセイガナニカラシカケテイルカノウセイガタカイ。ソコヲサガシテイケババイ」

「……それって結局は全部探せつて事だろ?」

「ハヤイハナシガソウダ」

ギドの説明にジークは結局は現状では怪しいところを確認して行く事しかできない事に大きく肩を落とし、

「とりあえず、俺はそこを行くから」

「ええ、私はしばらくギドと歩くわ」

ジークは魔力を感じる壁を押すと手は壁の中をすり抜けて行くため、ジークは単独行動に移る。

「……やつぱり、ダメだろ」

ジークはフイーナ達と別れて遺跡の中を歩いているが妖精のいたずらに惑わされてしまったようで完全に迷子になってしまった。

「……さてどうするかな？ 戻るとしても合流できる自信はないな」

ジークの視線の先には自分が迷子になったと確信した先ほど倒した石の人形が転がっており、ジークは大きくため息を吐くと、

「ん？ 何か光ったか？」

ジークは改めて妖精のいたずらに惑わされないように集中しようとした時に倒れている石の人形のそばが弱々しい光を放ち、ジークはその光に何かを感じたようで石の人形のそばまで歩き、

「動き出したりしないよな？ ……これが光ったのは？」

近づいては見た物の先ほど苦労して倒したため、1人では対処できないと思っており、警戒をしているが石の人形の身体のそばには小さく光る赤い球体が転がっている。

「これって、たぶん、こいつの『アだよな？ なら、動く事はないと思うけど』

ジークは赤い球体を拾い上げると石の人形が動かない事に安心した

ようで大きくため息を吐き、

「まあ、何かの役に立つかな？ 貴重なものではあるわけだし、それに魔導銃^{キャリバー}の修理に使えば儲けものだし」

ジークは赤い球体を懷にしまうとノエルの探索に戻ろうと妖精のいたずらを見極めるために目を閉じて集中する。

「ん？ ここが一番、おかしな気配がする？ そう言えば、フィーナ達はこの辺から出てきたよな？ ノ、ノエル？」

「……あ、あの。ジークさん」

ジークはフィーナ達が突然現れて石の人形に攻撃した事を思い出して壁に手を伸ばした時に目の前にはノエルが現れ、ジークの伸ばした手はノエルの胸に触れ、彼女の顔は真っ赤に染まって行き、

「ま、待つて。ノエル、こ、これは事故なんだ！！ わざとじゃない！」

「は、はい」

ジークは慌ててノエルに謝罪するとノエルは顔を真っ赤にしたままうつむいてしまい、

「あ、あの。ノエル、一人で大丈夫だった？ 魔物とか、こんなのに襲われなかつたか？」

「は、はい。わたしは大丈夫です」

ジークは話を変えようと一人だったノエルを心配するとノエルは大きく頷くと、

「それじゃあ。ノエルと合流できたわけだし、次はフィーナやギド達と合流しないと危ないから、こんなのが何体も出てきたら対処何か出来やしない」

「そうなんですか？」

「ああ。やつと倒した感じだしね。機械的に生み出された魔法機械じゃ、俺の魔導銃キャリバーではたいしたダメージも『えられないからな』」

ジークは先ほど胸を触ってしまったため、2人つきりは気まずいため、フィーナ達と合流を急いでとするがノエルとは目を合わせない。

「ノエル、フィーナ達の居場所はわかつたりしないよな？」

「わかつていたら、もっと早く合流できました」

「それもそうだ。妖精達のいたずらを止める手立てがあれば楽なんだけど、どうにかならないかな？……あれ？ノエルは妖精達のいたずらを止められる事ってできないかな？」

ジークはこの遺跡が迷宮化している原因である妖精達をどうにかできないかと考え始めたようである。

「いたずらを止めるですか？」

「ああ。魔法機械が他にいないとは限らないし、そう考へるとまとまって歩かないと不味いだろ。それに夜が明けたら冒險者達も押し寄せてくる。ノエルは隠せるかも知れないけど、ギド達は危ないだろ。手さぐりで奥を探して道に迷うよりは先にそつちを解除した方が効率が良いかも知れない」

ジークはノエルやギドの事を考へると悠長に時間をかけている事が出来なかつた事を思い出し、先に妖精達のいたずらを止める事に決めるが、

「で、ですけど、妖精さんと話し合ひをするにしてもビリしたら良いんでしようか？」

「そりなんだよな

方法に心当たりがあるわけもなく、2人で首を傾げる。

「……一先ずは魔力が強いところを探すしかないのか？」

「魔力が強いところですね？……わたしが見たところだとあの灯りが点いたところが1番、妖精さん達が多くて魔力が強かつたと思いますけど」

「……そこかよ。考へるとそこ以外にあり得ないか」

ジークはギドの言っていた魔力が強い場所を探そうとするがノエルは首を傾げたままギド達と会った場所が1番だと言い、ジークはどうして今まで気が付かなかつた事に眉間にしわを寄せ、

「一先ずはこっちだつたか?」

「違いますよ。こっちです」

「ノエル、何を言つてるんだ。俺はこっちからきたんだぞ。それに……あれ?」

ジークは先を目的の場所に戻ろうとするがノエルはジークとは反対のジークが歩いてきた方向を指差すとジークは一つの違和感を持つ。

「どうしたんですか?」

「いや、ギドの魔法で石の人形が倒れたのは前のめりだつたから、ノエルの指差す方に進むとして、それなら、俺はどうしてこっちからきたんだ?」

「壁をすり抜けていろいろに戻つてしまつたんじゃないですか?」

ジークは改めてこの場所に戻るよう進んでいかつた事に首を傾げるとノエルは妖精のいたずらで完全に惑わされているのではないかと首を傾げるが、

「いや、もしかしたらなんだけど……」

「ジークさん、そこには魔力を感じませんから、何もないんじゃない

いですか？」

「……いや、妖精達は確かに魔力があるからそれを察知して進んできたんだけど、魔力が感じなかつたところは調べていらないんだよ。魔導機械があるんなら、妖精の魔力以外でも惑わす何かがあるかも知れない」

ジークは今の自分達は妖精だけではなく、他の原因もあるのではないかと魔力の感じられない壁を調べ始める。

「……ノエル、こここの壁つて魔力は感じないよな？」

「はい。妖精さん達は感じられません」

「だよな……でも」

ジークは魔力が感じられない壁の1個所で何か気になるものがあつたようでノエルに魔力の確認を頼むが魔力が感じられない壁の中にジークの腕は埋まつて行き、

「ど、どう言つ事ですか？」

「さつきも言つたけど、妖精達のいたずらにとらわれ過ぎて真実が見えてなかつた。壁があるように見えてもないとこには魔力だけで偽装されているわけじゃないんだ」

「そ、それこそ、どうしたら良いかわからなくなつたんじゃないですか？」

ジークは妖精の魔力だけを追いかけていてはいけないと言つがそれ

せりの遺跡をそぞろ迷宮化してこるだけである。

「……確かにそう言わなければそつか。参つたな」

「ですよね」

「……一先ずはギド達は魔法を見てくだらうから、俺達は魔導機械マジナかな？……いや、違うな」

ジークはノエルの言葉に頭をかくとフイーナやギドとは違つた突破口で遺跡の奥を探し出そうとするがジークはまた、何かが引っかかつたようである。

「どうかしたんですか？」

「いや、俺達はノエルやギドが妖精の魔力を感じたからそつちを原因として探してきたわけだろ。妖精は何の目的があつて道を隠しているんだ？この遺跡に来た人間を騙して何になる？」

「それはわかりませんけど、妖精さんはいたずら好きなのはみんなも知っている事ですよね？」

ジークは妖精達にもいたずら以外にも目的があるのでないかと考え始めたようだがノエルはジークの疑問に答える事は出来なく、首をかしげており、

「……そつなんだけどな。遺跡の奥の魔剣だか聖剣を取られると人が来なくなるからか？ だとしても、限度つてものがあるだろ。それも、こんな人が来るかどうかもわからないより、人にいたずらを

するなら外に出た方が効率が良い」

「……えーと、妖精さん達って効率とかって考えるんですかね？」

「何事も効率的に合理的に人間も妖精も一緒だろ？」

ジークは妖精達が遺跡の奥にとどまっている理由がわからないようで首をひねっている様子にノエルはジークが効率と言うのは妖精にはジークと同じ考え方を持つものはいないと苦笑いを浮かべるがジークは人間以外にも効率を考えて動くものは必ずいると笑う。

「そうでしょうか？」

「ノエルだって一緒だろ。俺の両親は人間の勇者で名前が知れ渡つてから考えを変える事ができたら、早く解決するかも知れないからだろ。それに探すより、うちで待っていた方が効率的だと思ったわけだろ。目的のために考えれば行きつくのは合理的に効率的に動く事に行きつく」

「……確かにそうかも知れませんけど」

しかし、ノエルにはジークの考えが理解できないため、首を傾げる
とジークはノエルも効率的に動いた結果であると言い、ノエルは納得できなさそうだがそれでも自分の行動と重ねてしまつたため、何も言えないようであり、

「だ、だとしたら、妖精さん達はなんの目的があつていたらをしているんですか？」

「そりゃあ、遺跡の奥を隠すためだろ」

「それだと矛盾しませんか？」

ノエルはジークの考えている事がわからないようで妖精の目的を聞くがジークはくすりと笑うと、

「前提目的が違う可能性があるんだよ。俺達は妖精はただ、遺跡に入つて来た人間にいたずらをするのが目的だと思っていた。それが妖精だから」

「はい。妖精さんはいたずらが大好きですから」

「それが今回に限つてはもしかしたら間違いだつて可能性はないか？」

ジークは妖精達の目的がいたずら目的ではないと疑つており、

「ど、どう言つ事ですか？」

「妖精は長寿だろ。そして、ずっとこの場所にとどまつていた。この遺跡の奥の物を世に出さない事を目的としていたら？」

妖精の目的は遺跡の奥に眠るものを見つけている可能性が高いと言つ。

「この遺跡を作った人間はかなり高位の魔術師で魔導機械に詳しい人物。妖精を従える事が出来るような。だから、魔導機械と妖精達が2つの特徴を生かして奥への道を塞いでいる」

「妖精さんを従えるって、そんな事ができるんですか？」

「従えるは言い方が悪いけど、彼らが遺跡の奥を隠したがるくらいに妖精達を心を通わせていたんだろ」

ジークは推測でこの遺跡を作り上げた人間像を話すとノエルは真面目な表情をし、

「ジークさんの言う事が正しいなら、わたし達は奥に必ず行かないといけないです。妖精さん達と心を通わせる事が出来た人なら、わたしと同じ事を考えたかも知れません。奥に眠っているものを魔族わたくちと人族ジークさんたちの争いの火種にしてはいけないと思います」

「まあ、希望的なものも入ってるけどな……もし、ノエルが望んだ世界を夢見た人がいたなら、その想いに答えてあげたいな」

ノエルは自分の理想と同じものを掲げた人間がこの遺跡の奥に住んでいたと決めつけ、気合いを入れるように両手のこぶしを握りしめる。ジーグは苦笑いを浮かべながらもノエルの考えには賛同しているようで彼女の肩に一度、手を置くと、

「何の手がかりもないなら、予想立てて動くしかない。最初はギド達と会った場所を調べ直そう。ギドの話を信じれば俺達があの場

所に着いた時に灯りが点いた。もしかしたら、何か条件があつた可能性もある

「ギドさん達だけでは起きない何かがあつたわけですか？」

「ああ

ギド達と遭遇した灯りの点いた場所に戻ろうと2人で歩きだす。

「あ、あの。ジークさん」

「何だ？」

「灯りが点いた条件ってなんだと思います？」

目的の場所を探し始めてしばらくするとノエルはジークが気にしている場所の条件が知りたいようで首を傾げた時、

「……着いたな

「灯りが点きました」

目的の場所にたどり着いたようで先ほどまでは暗かつたはずの遺跡の中が明るくなる。

「条件は推測だ。ギド達だけでは灯りが点かなかつた事を考えるとドレイクみたいな高位の魔族がいないか？ もしくは俺達、人間か？ その2種族が一緒にいるのが条件かも知れないな」

「わたしとジークさんがいるからですか？」

「道を惑わされていた事を考えるとな。1人の時はここにたどり着かなかつた。もしくはたどりついていても灯りが点いていなかつたから、ここだと気付かなかつた可能性もある」

ジークはこの場所で灯りが点くのは異種族が共にいる事が条件ではないかと予測を立てていたようであり、

「ノエル、何かないかを探そう。俺の予想が正しければこの場所に遺跡の奥へ続く道がある。ノエルは壁にある魔力を見てくれ。俺は魔力をまったく感じないところに仕掛けはないかを見るから」

「は、はい」

ジークはノエルにこの場所を探索しようと近くの壁を調べ始め、ノエルは目を閉じて妖精達の魔力に集中し始めるが、

「あ、あの。ジークさん、この場所なんですけど、妖精さん達の魔力を感じないんですけど」

「……ああ。俺も思った。魔力は感じるけど妖精とは違う気がする」

ジークとノエルも同じ事を感じたようで顔を見合せた。

「これって、どういふ事ですか?」

「わからないけど、何かないか調べるしかないな……悪い。ノエル」

「どうかしましたか?」

ジークは壁を調べようと不用意に手を伸ばした時、ジークの耳には「カチッ」と小さな音で何かのスイッチを押したような音が聞こえるが小さな音だったため、ノエルの耳には届いていなかつたようであり、

「……俺、今、変なスイッチを押したかも知れない」

「それって、何が起きるかは」

「……わかつたら、嬉しいね」

ジークは顔を引きつらせながら、失敗した事を告げるとノエルはジークから少し距離を取るように後ろに下がり始め、

「とりあえず、この手を避けてみたいんだけど、何があるかわからぬから防御系の支援魔法とかをかけてくれると嬉しいんだけど」

「そ、そうですね。何があるかはわかりませんけど、罷つて可能性はありますし」

2人は最悪の事を考えてノエルは支援魔法に移りうとした時、「ガ

「ラガラ」と大きな音を立てて何かが崩れて行くような音が2人に向かって近づいてきており、ジークはその音が壁の奥から自分に向かつて近づいてきている事に気づく。

「……ノエルさん、俺、死ぬかも知れない」

「な、何を言つてるんですか。あ、諦めちゃダメです!! と言つが、明らかに何かが近づいてくるんだから、離れてください!!」

「それも、そうだな」

ジークは自分に迫つてきている恐怖に顔を引きつらせたまま動かすにいるとノエルはジークに壁から離れるように言い、ジークは慌てて壁から離れると今までジークが立つて場所の足元と壁は崩れ落ち、

「階段?」

「ですね」

足元には下に続く階段が現れる。

「どうする? 下に行くか? フィーナ達を待つか?」

「で、でも、時間がないんですよね?」

「それはなんだけど、壁が崩れ落ちたんだぞ。下で何かあったら、絶対に生きて戻つてこれないし」

派手に壁が崩れ落ちた事に2人は先に進まないといけない事はわからながらも踏ん切りはつかないようで顔を見合せると、

「で、でも、行かないといけないんです。行きましょう。だ、大丈夫です。きっと行けます。ジークさんが居てくれると凄く心強いですから」「

「ノエル……わかった。行つてみよう。ここまできたんだ」

「あ、あの。ジークさん、手を握つても良いでしょうか?」

「あ、ああ」

ジークとノエルは奥に進む事を選び、不安を振り払つようにお互いの腕を握つて階段をおり始める。

「ノエル、足元に気を付けてくれよ。さつき、奥の壁が崩れていたわけだし、足元には崩れた壁がある……ない?」

「ないです」

ジークはランタンで足元を照らしながら階段を降りるが壁の破片は階段にはなく、2人は首を傾げると、

「……やっぱり、この遺跡を作った人に俺達つてからかわれてるのか?」

「そ、そんな感じもしてきます」

ジークとノエルは薄々、感じていた事を口に出し、

「まあ、油断してると危ないから、気を引き締めような

「そうですね。足を出したら、階段が崩れるとかあってもイヤですね」

「……あります」

ジークとノーハルは周りを警戒しながら階段を進んで行く。

第39話

「……とつあえずは下まで着いたな」

「やうですね」

2人は階段を降りると階段には何も仕掛けはなく無事に最下層まで到着すると周囲を警戒するようにランタンで周りを照らそつとすると、

「灯りが点いたな」

「はい……」

先ほどと同様に灯りが灯り始め、奥に続く1本の道が繋がっている。

「……誘われてるのかな？」

「わからないんですけど、奥に行くしかありませんよね」

「まあな……」

2人は遺跡の奥に誘い込まれていてる感じがするが先を進む事しか2人には選択肢がないため、前に進もうとするが、

「ジークさん、何かあるんですか？」

「いや、ノーハルと2人になつてからは順調に進んでいると言つ気がするからな。さつきも言つたけど誘われてる気がするんだよ。俺と

ノエルの2人で条件がそろつたのかも知れない」「

ジークはこの遺跡は侵入者を選んでいる可能性が高いと確信したようで大きく頷き、

「行こう。この先にあるものはきっとノエルの役に立つものだ……そんな気がする。たぶん、ギドが言っていたような聖剣とか魔剣の類ではないと思うんだ」

「はい。わたしもそんな気がします」

ジークとノエルは直観的にだがこの奥にあるものは武器ではないと感じたようで2人で歩きだす。

「開けるぞ」

「はい」

1本道を進むと奥には両手開きの大きなドアがあり、2人は大きく頷くと息を合わせるようにドアを開くと、

「……部屋？ 居住スペースってところかな？」

「そうみたいですね」

遺跡の主がなくなつてから、掃除が行われているわけもないため、埃が厚く積もつた部屋であり、2人は中を見渡すとこの部屋には中央に丸型のテーブルが1つそして部屋の形は四角形であり、壁にはジークとノエルが入ってきたドア以外にも3方向に部屋があるようである。

「とりあえずは」の部屋から調べるか？」

「でも、」の部屋には何も無さないですか？」、3つの部屋に入るための居間つて感じがしますけど」

「確かに目立った物はテーブルしかないか。それじゃあ、どこから行くかな？」

「」の部屋つて普通は中央の部屋にあっていて欲しいですよね？」

「まあ、そんな気もするけど……」

この中央の部屋には特に何も無さそうではあるが2人は中央のテーブルまで歩き、3つの部屋、どこから調べよつかと話をするとノエルは自分達が入ってきたドアとは対面にあるドアに駆け寄り、ドアを開こうとするが、

「……開かないですね」

「カギがかかっているんじゃないかな？」カギは他の2つの部屋にあるのかもな」

ドアは開く事はなく、ジークはドアを調べるとドアには小さなカギ穴があり、このままではドアは開かないようであり、

「とりあえず、他の部屋もカギがかかっていないか調べてカギがかかっていない部屋から調べよつか？」

「そうですね。とりあえずはあつちを見てみましょ」

「ああ」

ジークとノエルは今度は入口から左側の部屋の前まで進み、

「カギはかかつてなさそうだな。ノエル、開けるけど扉がないことは言えないから、注意してくれ」

「はい」

ジークはドアのノブに手をかけると部屋の奥から何か出でてくる可能性も考えられるため、ノエルを後ろに下げるとなっくつてドアを開ける。

第40話

「……寝室かな？」

「そうみたいですね」

ドアを開けると部屋は寝室のようであり、人間サイズのベッドと本棚などが置かれている。

「とりあえずは力ギもだけど、何か使えそうなものはないか?」

「使えそななものですか? 勝手に良いんですか?」

「遺跡探索で見つけた物は正当な報酬だよ。勝手について言つけど、この部屋の状況や遺跡の入口が埋まっていた事を考えるとずいぶんと昔にこの部屋の主はなくなっているわけだしね」

ジークは魔導銃キャリバーを片方潰してしまった事もあるため、何か収入になるものを回収しないと割に合わないためか部屋を物色し始め、

「本は……読めないな。ノエルは読めそうか?」

「いえ、見た事もない言葉です」

「ギドなら何か読めるのかな? 数冊、見て貰うか?」

本棚の本を開くが2人が読む事のできない文字で書かれており、2人は首を傾げるとジークは魔法使いであるギドなら読める本も混じつているかも知れないと考え、適当に2冊本を取った時、

「ジークさん、これってここに住んでいた人ですかね？」

「ん？ 待つて、今行くから」

ノエルが何かを見つけたようでジークを呼ぶ。

「ここに住んでいた人達って？ 絵か？」

「はい。それもこの女性の方なんですけど」

「金色の瞳に2本の角？ この人ってドレイクか？」

ノエルは壁にかけてあつた絵に何かを感じたようでジークはノエルが気になつてている絵を覗き込むとそこには1組の男女の絵が描かれており、その女性にはノエルと同じようにドレイクの象徴である金色の瞳と2本の角が描かれている。

「たぶん、そうだと思います。そして、男性の方は

「人間っぽいよな。昔にもノエルと同じ考え方を持った人達が居たつて事か？ でも……」

「そうですよ。きっと居たんですね」

男性の方は人間のように見え、ジークはノエルが考へてゐる種族間の争いを阻止しようと思った人達は居たのだと思つたようだがこの2人がこんな遺跡の奥に住んでいた事や今の世界に種族間の争いは絶えない事にその考へは失敗した事は直ぐに理解でき、言葉を飲み込むがノエルは自分と同じ考へがいたと言う事実だけしか見えてい

ないようで笑顔を見せる。

「まあ、実際はわからないな。絵だし、ここに住んでいた人とは限らないわけだしな。それより、カギを探そう。時間はあまりないし」

「は、はい。そうですね」

ジークはノエルの様子にこの2人が失敗した事は話さないと決める
と奥の部屋のドアを開けるためにカギ探しを再開させようとした時、

「ジーク、ノエル、いる?」

「フィーナさん、ギドさん」

フィーナとギド達がプリンが階段を見つけて追いかけてきたよう
ドアから顔をのぞかせ、

「追いついたか?」

「アア、シバラクアルイティタラ、イキナリアカリガツイタカラナ」

「フィーナとギド達は一緒に歩いていたのか?」

「ええ、それも通り過ぎた後に後ろで灯りが点いたのよ。意味がわ
からないわよ」

フィーナとギドは灯りが点いた後に部屋を見つけたようであり、

「そうか……ってなると、やっぱり、カギはドレイクと人間か?」

「何？ どうかしたの？ ジーク

ジークは考えていた条件が正解だった事に何かあるのか考えるような素振りをするとジークの様子にフィーナは首を傾げるが、

「いや、何でもない。ギド、悪いんだけど、こここの本棚の本を見てくれるか？ 僕とノエルじや読めなかつたから、何かないかと思つたんだけど」

ジークは何もないとザザヒに部屋にある本を調べて欲しいと頼む。

「……コレハイマヨリカナリマエノマホウモジダナ。ワカッタ。ソノカワリタンサクヲマカセルゾ」

「ああ。それじゃあ、人数も集まつたし、俺はもう一つの部屋を見てくれる」

ギドは本を一冊手に取るとパラパラとページをめぐり、何とか読めそうだと頷き、部屋を出ようとすると、が、

「フィーナ、お前はおかしな事をやつて物を壊すなよ」

「ジーク、あんたね」

振り返ると先ほど、祖母の部屋をめちゃくちゃにされた事もあるため、フィーナに足を引っ張るなど釘を刺し、フィーナの怒りの声が部屋には響き、

「あ、あの。フィーナさん」

「わかつてゐるわ。ノエル、手伝う事つてある?」

「は、はい。お願ひします。私では届かない場所もありますから」

ノエルはジークとフィーナの様子に苦笑いを浮かべながらも部屋の探索に戻る。

「…………」つづけはあるかな

ジークはフイーナが怒りに任せて自分を追いかけっこない事に少し
だけ安心したよつこ口を緩ませながらも寝室の対面にある部屋のド
アを開けると、

(キッチンみたいな感じかな？……そうなるとカギがあるとした
らあつちの部屋かな？まあ、何があるかも知れないし)

こちらの部屋はキッチンのようであり、遺跡の入口が埋まっていた
事から考えると大きな地震が過去にあった事が理解出来るくらいに
食器が床に落ちたのだろうか床には食器だつたものが碎けて散らば
つている。

(……こつちはずいぶんと荒れてるな。寝室はキレイになっていた
のに、まあ、魔術師が住んでいたみたいだから、本には被害がでな
いような魔法がかかっていたのかな？)

ジークはまだ原型をどどめている皿を一枚拾いあげながら、寝室と
のあれ具合の差に疑問を持ちながらも食器棚に皿を移すと、

(ん？これって、魔法薬か？ だとしてもいつのものかわからな
いし、使えるかは微妙だな)

いくつか、割れていらない小瓶が置いてあるのに気づき、手に取るが
この遺跡がいつの時代のものかわからないため、眉間にしわを寄せ
ながら魔法薬の状態を確認しようとふたを開ける。

(……と言つて、効果も效能もわからないしな。過去の魔法薬なら
分析しても何かわからないかも知れないし、それでも何かわかれば
良いか。ばあちゃんの本に書いてあるものかも知れないし)

ジークは魔法薬に価値がないと思ったようだが手ぶらでは帰るわけにもいかないため、魔法薬をカバンの中につめ始めると、

(ん？ 何だ。これ？ ……宝石？ 何かのコア？)

魔法薬の小瓶が置いてあったところの奥に先ほど石の人形に使われていた赤く光る石の一回り小さい石がある事に気づき、手を伸ばし、「これ、さっきの石の人形のコアに使われたものと同じだよな？……今更だけど、あのドアを開けたら、びっしりと並んだ石の人形とかあつたりして」

あまり考えたくない悪い考へが頭を過り、顔を引きつらせた時、

「ジーク、カギ、有ったよ」

「はい。ジークさん、見つけました」

カギを見せびらかすよに手に持ったフィーナがドアから顔を覗かせ、フィーナに続くようにノエルも顔をのぞかせ、

「ああ。じつちはこれと言った収穫はなしだ」

「そうなんですか？」

「それなら、早くこのカギでドアを開けようよ。お宝とのじ対面よ

ジークは2人の声に驚いたようでなぜか慌てて赤い石をポケットにねじ込むがノエルもフィーナもジークの行動には気付かなかつたよ

うでカギのかかった部屋のドアを開けようとジークを呼ぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4933w/>

勇者の息子と魔王の娘？

2011年11月13日21時52分発行